

裾花川扇状地遺跡群

尾 張 城 跡

市道古牧朝陽線道路改良事業・西尾張部土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

歴史は単なる時間の流れの集積ではなく、私たちの先祖の長い間の智恵と文化の集積であります。特に埋蔵文化財は先人たちの文化を伝えるだけではなく、現代の文化の在り方を見つめ直すうえでも礎となる貴重な国民の共有財産であります。

このたび、市道古牧朝陽線道路改良事業ならびに長野市西尾張部土地区画整理事業に伴い、裾花川扇状地遺跡群 尾張城跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は、過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財」第89集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用いただければ幸いです。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成10年3月

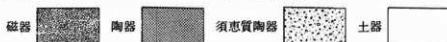
長野市教育委員会

教育長 滝澤 忠男

例 言

- 1 本書は、市道古牧陽陽線道路改良事業ならびに長野市西尾張部土地区画整理事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野市役所道路課ならびに長野市西尾張部土地区画整理組合理事長の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市大字西尾張部596-1他に位置する。遺跡範囲が不明瞭な現在、中世居館の名をとって尾張城跡と仮称するが、正式な遺跡名称については将来的な検討にゆだねるものとする。
- 4 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 5 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要領は下記の通りである。

- ・資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握し得るものを中心に掲載した。ただし特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象からはずしたが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るように保管してある。
- ・遺構番号は出土遺物等検索の都合から、調査時に用いた仮番号をそのまま使用している。
- ・遺構の測量は、株式会社 写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20の縮尺で基本図面を作成し、本書では基本的に1：80の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。
- ・遺物実測図に関しては基本的に土器1：4、土器拓影1：3に統一してあるが、その他のものについては、適宜縮尺を明記してある。
- ・土器実測図の内、焼物種については土器実測図断面をそれぞれ



で表現してある。また彩色色に関してはそれぞれ



で表現してある。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	2
第2章 尾張城跡について	3
第3章 調査概要	9
第4章 調 査	23
第1節 弥生時代	23
第2節 古墳時代	23
第3節 平安時代	32
第4節 中 世	36
第5章 尾張城跡出土焼物と遺跡の性格について	46

挿 図 目 次

第1図 調査地位位置図①(1:20,000)	1	第19図 弥生時代遺物実測図ならびに拓影	24
第2図 調査地位位置図②(1:10,000)	4	第20図 II区(下層)1号住居址出土土器実測図	25
第3図 昭和27年修正地形図	4	第21図 III区2号住居址実測図	26
第4図 尾張城跡周辺現況地形測量図	5	第22図 III区2号住居址出土土器実測図	26
第5図 調査区位置図	6	第23図 VI区1号住居址実測図	26
第6図 調査区全体図	7・8	第24図 VI区1号住居址出土土器実測図	27
第7図 I区全体図	9	第25図 VI区環濠ならびに1号住居址実測図	27
第8図 I区西半全体図	10	第26図 VI区環濠南壁土層堆積状況実測図	29
第9図 I区東半全体図	11	第27図 VI区環濠出土土器実測図	29
第10図 II区上層全体図	13	第28図 I区SK4号土壇実測図	30
第11図 II区下層全体図	14	第29図 I区SK4号土壇出土土器実測図	30
第12図 III区全体図	17	第30図 V区土器集中遺構出土土器実測図	31
第13図 IV区全体図	17	第31図 遺構外出土古墳時代遺物実測図	31
第14図 V区全体図	18	第32図 IV区1号住居址実測図	32
第15図 V区全体図	19	第33図 IV区1号住居址出土土器実測図①	32
第16図 VI区全体図	21	第34図 IV区1号住居址出土土器実測図②	33
第17図 VII区全体図	22	第35図 VII区1号住居址実測図	33
第18図 II区(下層)1号住居址実測図	23	第36図 VII区1号住居址出土土器実測図	34

第37図	Ⅲ区1号住居址実測図	34	第52図	出土中世焼物実測図②	61
第38図	Ⅲ区1号住居址出土土器実測図	34	第53図	出土中世焼物実測図③	62
第39図	平安時代土墳実測図	35	第54図	出土中世焼物実測図④	63
第40図	Ⅲ区SK7号土墳出土土器実測図	35	第55図	出土中世焼物実測図⑤	64
第41図	I区堀土層堆積状況実測図	36	第56図	出土中世焼物実測図⑥	65
第42図	中世土墳等実測図①	37	第57図	出土中世焼物実測図⑦	66
第43図	中世土墳等実測図②	38	第58図	出土中世焼物実測図⑧	67
第44図	V区SD1土層堆積状況実測図	42	第59図	出土中世焼物実測図⑨	68
第45図	Ⅵ区SD1土層堆積状況実測図	43	第60図	出土中世焼物実測図⑩	69
第46図	Ⅵ区SD5土層堆積状況実測図	44	第61図	出土石製品類実測図①	70
第47図	Ⅵ区SD6土層堆積状況実測図	44	第62図	出土石製品類実測図②	71
第48図	Ⅵ区SD11土層堆積状況実測図	45	第63図	出土石製品類実測図③	72
第49図	時期別焼物破片数累積グラフ	55	第64図	出土石製品類実測図④	73
第50図	想定方形区画位置図	56	第65図	出土古銭拓影	74
第51図	出土中世焼物実測図①	60			

表 目 次

表1	I区検出遺構一覧表	12
表2	Ⅱ区検出遺構一覧表①	15
表3	Ⅱ区検出遺構一覧表②	16
表4	Ⅲ区検出遺構一覧表	16
表5	Ⅳ区検出遺構一覧表	16
表6	V区検出遺構一覧表	20
表7	Ⅵ区検出遺構一覧表	20
表8	Ⅶ区検出遺構一覧表	22
表9	遺構別中世以後の焼物出土一覧①	57
表10	遺構別中世以後の焼物出土一覧②	58
表11	遺構別中世以後の焼物出土一覧③	59

第1章 調査経過

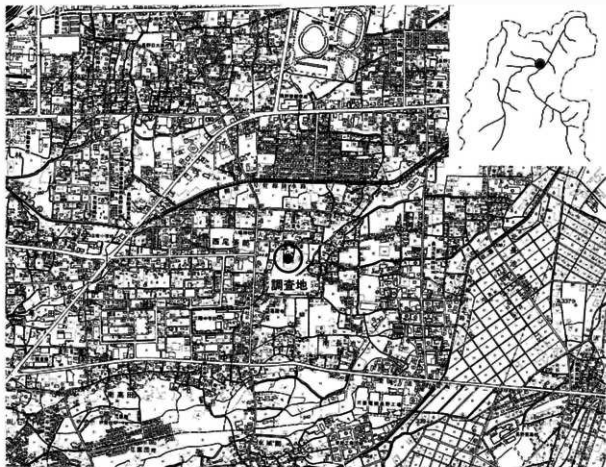
第1節 調査にいたる経過

長野市西尾張部地籍は、市街地中心からやや北東に位置し、工場等の進出も著しいものの、古くからの集落と新興の住宅地ならびに水田や畑地が展開する。

平成4年度において、この地域にて、市道古牧朝陽線道路改良事業ならびに、長野市西尾張部土地区画整理事業に伴う工事計画が具体化したのが、事業予定地周辺には周知の尾張城跡が存在することより、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）では、長野市西尾張部土地区画整理組合の委託を受け、事前に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、事業予定地内の任意の11地点について実施したが、尾張城跡と想定される付近を中心に、古代から中世と考えられる遺物包含層の存在を確認するにいった。この結果より、事業予定地内の遺跡範囲に該当する可能性の高い部分について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認されることとなった。

市道古牧朝陽線道路改良事業に伴う調査区は、後述のⅠ～Ⅴ区、西尾張部土地区画整理事業に伴う調査区はⅥ・Ⅶ区となり、調査は各事業の進捗状況にあわせて、平成5年度に第一次調査としてⅡ～Ⅶ区を、平成7年度に第二次調査としてⅠ・Ⅷ区の発掘調査を実施し、平成8・9年度に整理作業ならびに報告書作成作業を実施し、本報告書の刊行にいったものである。



第1図 調査地位位置図① (1:20,000)

第2節 調査の体制

(財)長野県埋蔵文化財センターにおける道路公団・鉄建公団にかかわる発掘調査を除き、長野市内の緊急発掘調査は、長野市教育委員会・埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。尾張城跡における調査組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	滝澤 忠男
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長	荒井 和雄 (～H6) 丸田 修三 (H7～)
庶務係	"	所長補佐 山中 武徳 (～H6) 小林 重夫 (H7～)
	"	職員 青木 厚子
調査係	"	所長補佐 矢口 忠良
	"	主査 青木 和明
	"	主事 千野 浩
	"	主事 飯島 哲也
	"	主事 風間 栄一 (H6～)
	"	主事 小林 和子 (H6～)
	"	専門主事 羽場 卓雄 (～H5) 太田 重成 (～H6) 清水 武 (H6～)
	"	専門員 中殿 章子 横山かよ子 (～H5) 笠井 教子 (～H6)
		山田美弥子 寺島 孝典 (～H7) 西沢 真弓
		小野由美子 (H6～) 勝田 智紀 (H7～) 藤田 隆之 (H7～)
		堀内 健次 (H7～) 宮川 明美 (H8～) 小林まゆ佳 (H8～)

発掘調査参加者 岡田久太郎 小松おてふ 小松正治 馬場和夫 平出包夫 平出敏子 福島ふみ子 福島宮二 丸山豊子 山田広三 山田宗雄 倉島紀代子 小林紀代美 小林三郎 小林こま代 小松未喜子 小松安和 酒井秀 清水七男 鈴木友江 徳永一 中沢雄司 待井春子 松浦サトミ 宮坂義憲 松尾よし子 桜井修白 大園正達 小林正宜 小林恒雄 山田玉枝 岡田亨 平出美智子 伊場清人 馬場一郎 平出悦二

整理作業参加者 西尾千枝 松澤ナオエ 倉島敬子 塚田容子 岡沢治子 徳成奈於子 向山純子

遺物の整理作業ならびに報告書の作成においては、市川隆之氏(財団法人長野県埋蔵文化財センター)の参加を得た。ご厚情に感謝申し上げます。また、長野市西尾張部土地区画整理組合におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、絶大なご協力を賜った。深甚なる誠意を表するものである。



第2章 尾張城跡について

長野盆地は、千曲川が東より貫流し、西方山地から流入する犀川は盆地の中央を東西に横断して千曲川に合流し、長野盆地を南北に二分する。

長野市街地東方一帯の平地は北半盆地の主要部をなし、今回の調査地もその中に位置し、地形的には西部山地から流出する裾花川・浅川をつくる複合扇状地の末端部とその前面に広がる千曲川の氾濫原からなるものといえよう。

裾花川扇状地は、旭山北麓の里島付近を扇頂に、東～南の方向に向かって長野市街地の主要部をのせ、南～南東では犀川の氾濫原に、東部では千曲川の氾濫原に接する。裾花川扇状地自体は、長野市街地でほぼ南東の方向に1/100程度の勾配でゆるく傾斜しており、市街地を流れる北八幡側・南八幡側・計鶴川などの水路の方向が扇状地の傾斜方向を示しているものといえる。

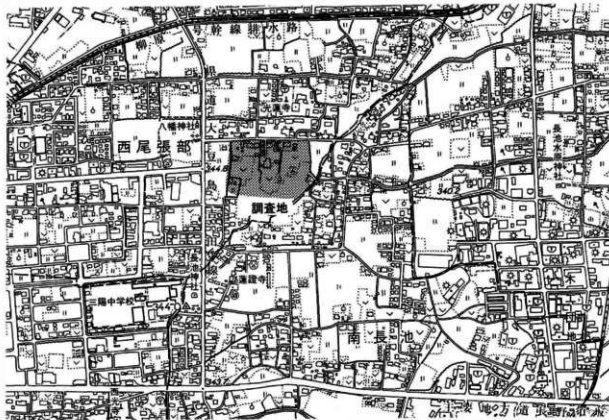
扇状地末端付近は浅川扇状地との複合扇状地をなすが、かつて裾花川が扇状地を浅く刻んで流れた痕跡が低地をなし、その間には扇状地面が微高地となって細長く東西方向に伸びている。低地は水田に利用され、微高地は古くからの集落が連なるが、今回の調査地もそのような微高地に位置するものと理解することができよう。

今回の調査地付近は、考古学的な調査事例はほとんどない地域であり、周辺の考古学的な環境についてはきわめて不鮮明であるといわざるを得ない。以下では、先行する文献の記述を抜粋し、尾張城跡の性格を想定する一助とした。

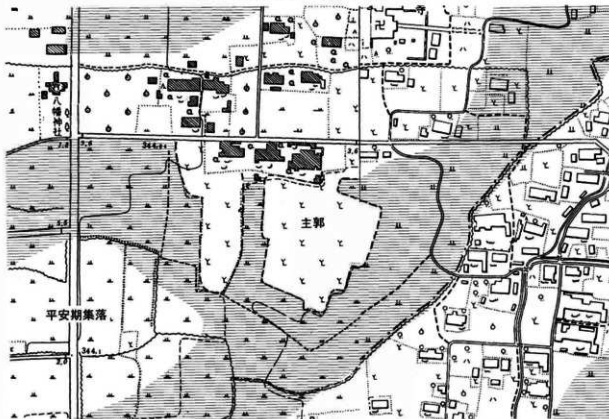
昭和11年に刊行された『長野縣町村誌』には、西尾張部村「午の方字村南にあり、本丸址東西五十三間、南北四十七間、二の郭址東西六十五間、南北三十八間一字形恰も曲尺の如し一内濠外濠馬出し回字形をなす、築城年月及び城主名不詳。天正年間尾張備中守住せしと伝う。金古まで城跡其の高きこと平地より七八尺に過ぎたり、耕て不便なるにより剛削し今耕地となる。人民適々土を穿ち兵器の類を得ることあり。」と記されている。

昭和56年に刊行された『古牧誌』には上記町村誌からの引用の他に「堀址は、かなり埋め立てられて、明治前すでに水田となっているが、明和2年(1765年)2月の「西尾張部村西地改野帳」に、中田十間反・三十八間老反三畝九歩、同八間半・三十四間老反十歩、同六間半・三十八間八畝七歩と記されているのは、この堀にあたる部分であろう。」「この城跡が何時の頃造営されたものか、古牧地区の他の館址と同じように、確実なことはわからない。また、この居館主は何人であったのか、「町村誌」には天正年間(1573～1591年)尾張備中守が居住したところというあり、「科野佐々礼石」(万延元年にほぼ完成したもの)には、尾張部三郎がここに居館して、当所一村を支配していたが、永禄のはじめ武田氏に降って、この城館を引払ったことがかかれている。伝説では、昔尾張部氏が平林氏を攻めようとして、馬を飛ばし五分一と平林のほぼ中間を西から東へ流れる北八幡川にかけられている馬結橋まで来たところ、自分の家の方から急に火の手が上がったので、尾張部氏がこの橋から引き返した。そこで、馬結橋を駒返り橋とも呼ぶようになったといわれている。このように居館主であったという尾張備中守や尾張部氏の実在については当時の確実な史料の上からは確かめられない」とされている。昭和56年小林計一郎氏の指導で、測量調査が行われたが、「現状はほぼ正方形に近い不整多角形をしており、一部に人家があるが、大部分は畑地になっている。周囲の水田よりも20cmないし80cm高い台地になっているが、土塁はない。あるいは土塁を削平して中の畑へならしたのか。西部にはかなり明白に堀跡が残っており、堀の西側は馬場と呼ばれている。堀の内の総面積は5,870㎡である」との所見が得られている。

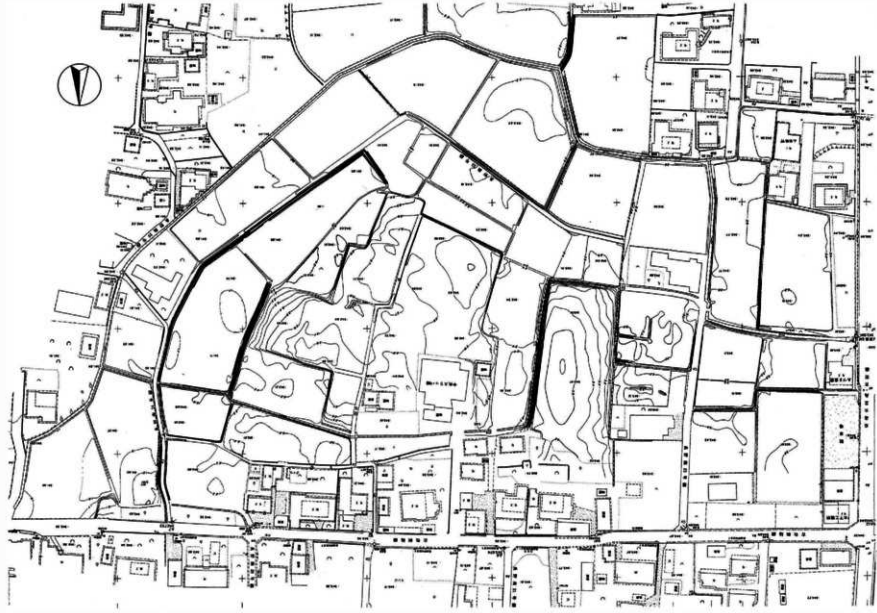
今回の調査も、尾張城跡の一部にトレンチを設定したような状況があり、得られた情報は甚だ少ない。尾張城跡の性格解明にはまだまだ、さらなる調査が必要とされよう。



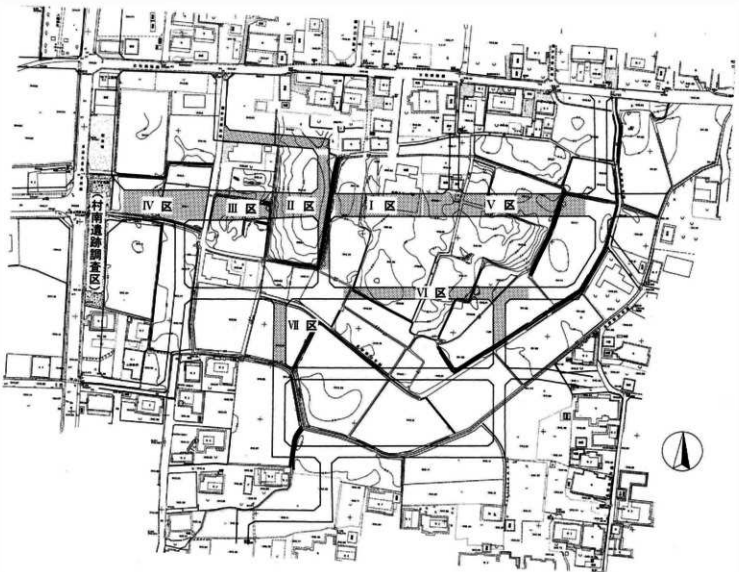
第2図 調査地位置図② (1:10,000)



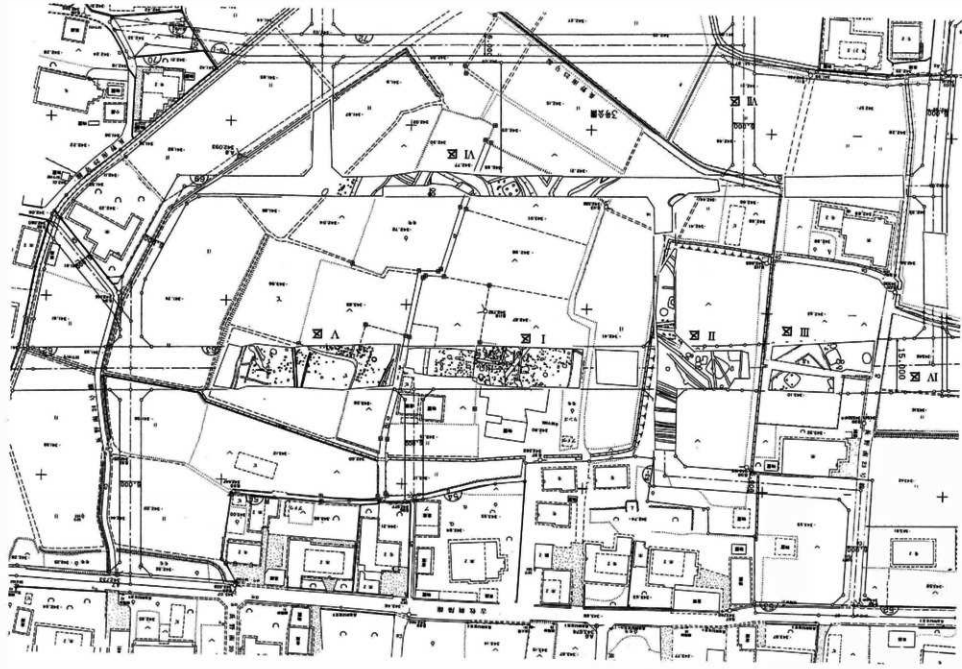
第3図 昭和27年修正地形図 (1:3,000)
(スクリーン部分は想定低地範囲)



第4圖 尾張城跡周辺現況地形測量圖 (1:2,000)



第五图 調查区位置图 (1:2,000)



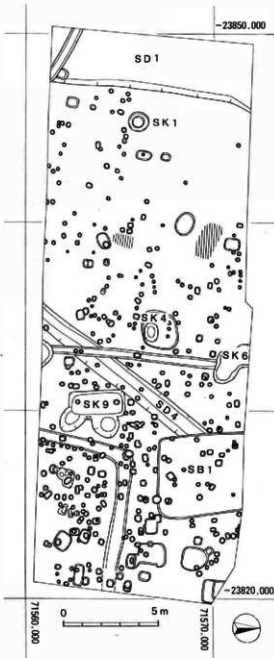
第6圖 調査区全体圖 (1:1,000)

第3章 調査概要

I 区の調査概要

V区とともに主郭中央部に位置する調査区で、その西側半分が該当し、SD1西側に堀が位置する。土城12・溝址5、竪穴状遺構1、堀跡1を検出している。もっとも時期の遡る遺構はP50で、弥生時代後期の土器を出土している。SK4は古墳時代前期の土城。SD1西側に位置する堀は、V区で検出されたSD1と対をなすものにとらえられ、両者によって囲まれた、約50m四方の方形の区画が、何らかの居住遺構を示す可能性が指摘されている。その他の土城や溝址もおおよそ14世紀後半～15世紀代の年代が想定されている。調査区東側を中心に柱穴群が集中して検出されているが、重複が著しく配列関係を把握するにはいたっていない。なかには内部に礎石

と思われる石を据えつけたものかなりの企画性をもって検出されているが、明確な構造はとらえるにいたっていない。平均的には径30cm前後の円形もしくは方形の掘り込みである。かなりの数の建物跡の存在が想定できよう。



第7図 I区全体図(1:200)



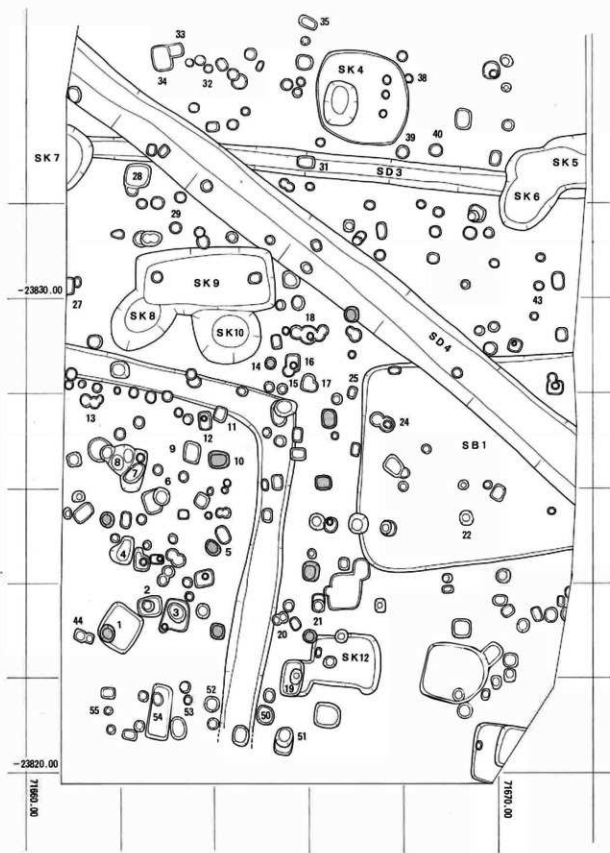
I区西側



I区東側



第8图 I区西半全体图 (S=1/80)



第9図 I区東半全体図 (S=1/80)
 (スクリーンは礎石のある柱穴を示す)

遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等	
SK1	中世14C後半	円形 1.00×1.05m 深さ63cm		ロクロカワラケ	
SK2		不整形円形 1.00×1.30m 深さ26cm			
SK3		円形 0.85×0.70m 深さ17cm			
SK4	古墳前期	不整形円形 1.95×1.90 深さ67cm		土師器甕	
SK5		不明 1.30m×? 深さ24cm			
SK6	中世14C後半	長円形 1.75×1.25m 深さ25cm			
SK7	中世14C後半	不明 深さ57cm			ロクロカワラケ 在須すり鉢 越前甕
SK8	中世15世紀	長円形 (1.50) × 1.10m 深さ74cm			ロクロカワラケ 珠洲甕
SK9	中世15世紀	長円形 2.95×1.35m 深さ91cm			ロクロカワラケ 在須すり鉢 瓦すり鉢
SK10	中世14C後半	円形 径1.45m 深さ79cm			古瀬戸御皿 ロクロカワラケ 珠洲甕
SK11	欠番	(柱穴群)		在須すり鉢 珠洲甕 ロクロカワラケ	
SK12		方形 1.45×1.20m 深さ10cm			
SD1	近世18C後半	直線 深さ30cm		伊万里陶胎碗 鉄軸甕 瓦すり鉢	
SD2		直線 上幅60cm 底幅25cm 深さ15cm			
SD3		直線 上幅50cm 底幅30cm 深さ10cm			
SD4	中世	直線 上幅1.20m 底幅50cm 深さ47cm		白磁皿	
SD5	中世	直線 上幅1.20m 底幅50cm 深さ47cm		瓦すり鉢	
SB1	中世15C後半	方形 上幅80cm 底幅50cm 深さ14cm		ロクロカワラケ 在須すり鉢 古瀬戸瓶子	
堀		隅丸方形 (4.50) × 4.30m		砥石	
	堀	直線 上幅6.70m 底幅4.20m 深さ0.9m		ロクロカワラケ 古瀬戸 珠洲甕 酸化内耳 石白 凹石 五輪塔	

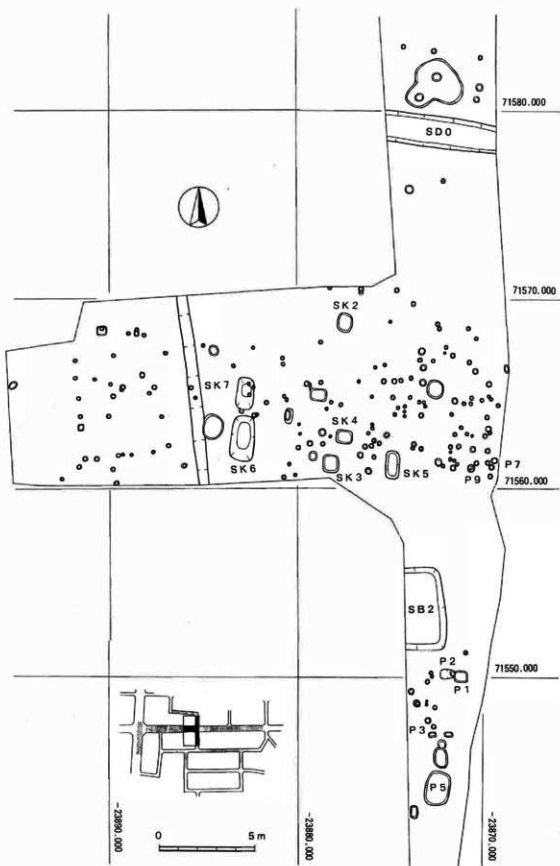
表1 I区検出遺構一覧表

II区の調査概要

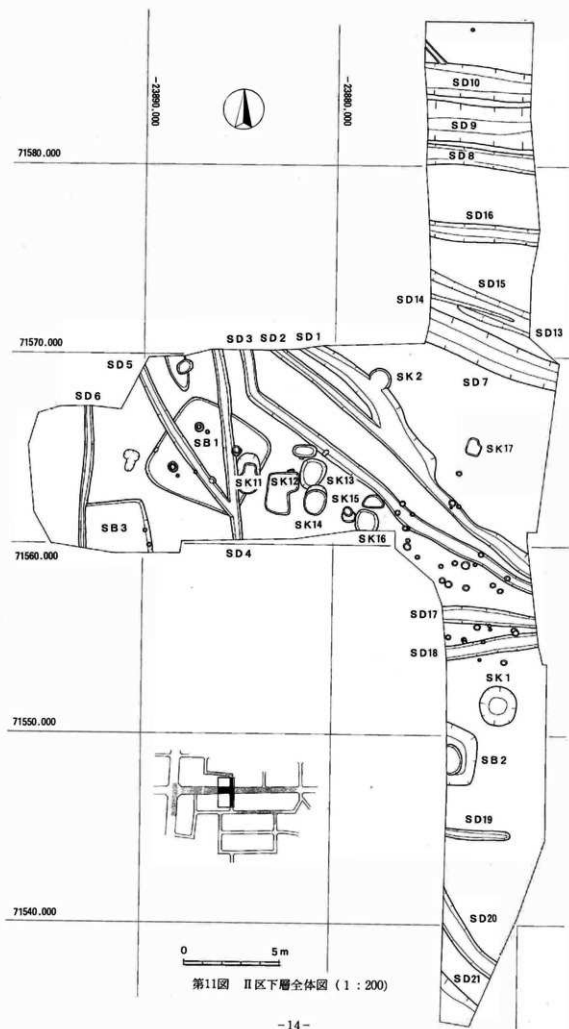
II区はI区で検出された堀の西側に位置し、水田として利用されていた堀跡の低湿地よりも、地形的に1m程の高まりを有しており、地元では通称「馬場」と呼ばれていた。上下2面にわたる遺構面を確認している。出土遺物から明確に時期比定し得る遺構が少なく、詳細不明な部分が多い。上層で検出されたSK4は覆土上層より比較的多量の古銭を出土しており、墓址の可能性も考えられる。下層では土壌とともに北西から南東方向へ延びる多数の溝址が確認されている。特にSD8・9・10は平行して掘削され、また掘り込み規模の面からも、防衛的機能を有するものである可能性が考えられる。その他の溝に関しては、明確な規則制は認められない。SB1は古墳時代前期の隅丸方形住居址で、炉や柱穴配置等が明確となった唯一の住居址である。



II区下層



第10图 II区上層全体图 (1:200)



第11图 II区下層全体图 (1:200)

遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等
SK 1	中世	円形 径2.10m 深さ64cm		ロクロカワラケ 青磁碗
SK 2		不整形 0.90×0.85m 深さ40cm		石鉢
SK 3	中世	方形 0.85×0.85m 深さ46cm		ロクロカワラケ 在須すり鉢 酸化内耳 珠洲すり鉢
SK 4		長方形 0.90×0.65m 深さ35cm		
SK 5	中世14C以後	不整形 5.50×0.85m 深さ52cm		珠洲壺
SK 6	中世	長方形 2.35×1.25m 深さ38cm		ロクロカワラケ
SK 7		長方形 1.60×1.00m 深さ15cm		
SK11		長方形 2.15×1.10m 深さ30cm		
SK12	中世	不整形 2.20×1.70m 深さ24cm		ロクロカワラケ
SK13		円形 1.60×1.30m 深さ20cm		
SK14		円形 1.50×1.20m 深さ27cm		
SK15		不整形 1.10×0.60m 深さ49cm		
SK16		円形 径1.20m 深さ37cm		
SK17		不整形 1.00×0.80m 深さ30cm		ロクロカワラケ
SD 0		直線 上幅1.70m 底幅1.05m 深さ20cm		
SD 1	中世15C以後	直線 上幅1.00m 底幅0.40m 深さ30cm		ロクロカワラケ 珠洲壺 酸化内耳
SD 2		直線 上幅0.60m 底幅0.30m 深さ23cm		
SD 3	近世	直線 上幅0.70m 底幅0.35m 深さ11cm		ロクロカワラケ 珠洲すり鉢 近世土瓶
SD 4	中世15C以後	直線 上幅0.70m 底幅0.30m 深さ16cm		酸化内耳
SD 5	中世14世紀	直線 上幅0.50m 底幅0.20m 深さ29cm		ロクロカワラケ 在須すり鉢 珠洲壺 古瀬戸卸皿
SD 6		直線 幅0.50m 深さ5cm		
SD 7		直線 上幅1.80m 底幅0.80m 深さ50cm		
SD 8		直線 上幅0.90m 底幅0.50m 深さ37cm		
SD 9		直線 上幅2.40m 底幅0.70m 深さ70cm		
SD10	中世14世紀	直線 上幅1.70m 底幅0.90m 深さ62cm		ロクロカワラケ 在須すり鉢
SD11				
SD12		直線 幅0.30m 深さ5cm		
SD13		直線 幅0.30m 深さ6cm		
SD14		直線 幅0.20m 深さ5cm		
SD15		直線 幅0.30m 深さ5cm		
SD16		直線 上幅1.00m 底幅0.40m 深さ16cm		
SD17		直線 上幅0.90m 底幅0.50m 深さ11cm		
SD18		直線 上幅0.85m 底幅0.50m 深さ11cm		
SD19		直線 上幅0.50m 底幅0.20m 深さ26cm		

表2 II区検出遺構一覧表①

遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等
SD20	古墳前期	直線 上幅1.00m 底幅0.60m 深さ20cm	地中	土師器甕 高坏 壺
SD21		直線 規模不明 深さ23cm		
SB1		隅丸方形 5.30×5.00m		
SB2		隅丸方形 4.30×(2.20)m 深さ50cm		
SB3		隅丸方形 規模不明 深さ20cm		

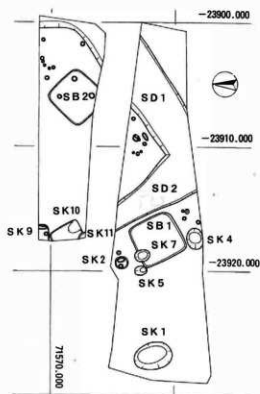
表3 II区検出遺構一覧表

遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等	
SK1	平安	長円形 2.85×2.35m 深さ90cm		墨書土器 土師器甕 高坏 須恵器坏	
SK2		円形 径1.00m 深さ53cm			
SK4		円形 1.60×1.20m 深さ40cm			
SK5		円形 径0.90m 深さ41cm			
SK7		円形 径1.10m 深さ37cm			
SK9		形態 規模不明 深さ10cm			
SK10		隅丸方形 規模不明 深さ10cm			
SK11		形態 規模不明 深さ6cm			
SB1		隅丸方形 4.00×3.60m 深さ40cm			土師器甕 坏 須恵器坏
SB2		古墳前期			隅丸方形 3.70×3.60m 深さ20cm
SD1	平安	方形 上幅3.70m 底幅3.00m 深さ31cm			
SD2		方形 上幅3.40m 底幅3.10m 深さ25cm			

表4 III区検出遺構一覧表

遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等
SK1	平安	長円形 1.85×1.10m 深さ10cm	北カマド	土師器甕 羽釜 高台坏 坏 須恵器坏
SB1	平安	隅丸方形 4.30×(3.70)m 深さ17cm		
SD1	平安	上幅40cm 底幅25cm 深さ15cm		

表5 IV区検出遺構一覧表



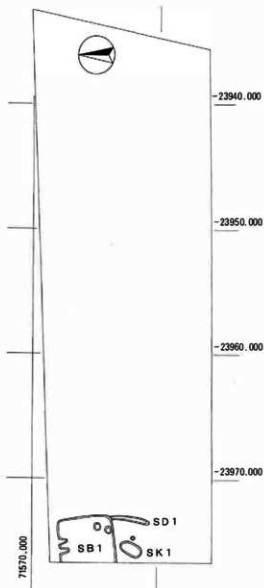
第12図 III区全体図 (1 : 300)

III区の調査概要

II区の西側に位置する調査区で、中世段階の遺構は基本的に確認されておらず、平安期の遺構が主体となる。確実なもので、平安期の土壇4基、住居址1軒を確認している。平安期集落の範囲は明確でないが、IV区で検出されている同時期の住居址とは間に広範な低湿地が存在するようで、別の集落となる可能性が考えられる。SD 1・2は時期は明確でないもの方形に屈曲する可能性が高く、掘り込みの規模も比較的にしっかりしたものであった。SB 2は住居とする明確な根拠はないが、古墳時代前期の所産である。

IV区の調査概要

III区で検出された平安期の住居址から、約50m程の幅の低湿地をはさんで、平安時代の住居址1軒・土壇1基・溝跡が検出されている。III区の平安期の遺構群との関係を考えるよりも、むしろ本調査区西端付近から微高地が西方へ展開し、そのうえに別の小規模な平安期の集落が展開するものと想定している。



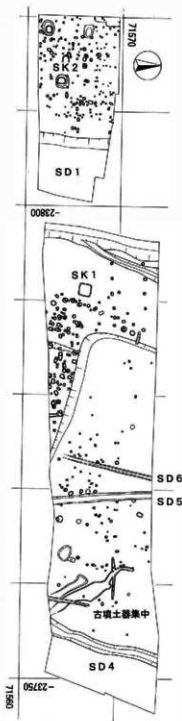
第13図 IV区全体図 (1 : 300)



III区調査風景

V区の調査概要

1区とともに主郭中央部に位置する調査区で、その東側半分が該当する。中央付近にて検出されたSD1は1区で検出された堀と対となるものと推定され、両者によって囲まれた、約50m四方の方形の区画が、何らかの居住遺構を示す可能性が指摘されている。SD1の西側がその区画内となるが、土壌とともに柱穴が群集する様子を呈し、重複のため配列関係を把握するにはいたっていないが、掘建柱建物址等の痕跡を示すものであろう。またこの状況は、SD1以東の部分にも認められ、おおよそ柱穴群が東西方向を中心に密集する傾向がうかがわれ、何らかの居住遺構が集中する可能性が考えられる。これ以東は、地形的に一段下がり、若干の柱穴と溝が遺構の主体となる。SD4以東は漸移的に低湿地へと移行していく状況がうかがわれ、SD4が何らかの境界的な役割をもっていた可能性も考えられる。



第14図 V区全体図 (1:400)



V区西半



V区東半



第15図 V区全体図 (1 : 200)

遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等
SK 1	中世15世紀	方形 1.30×1.20m 深さ1.50m		青磁碗
SK 2	中世15世紀	円形 径1.20m 深さ0.80m		瓦質香炉 青磁碗 酸化内耳 ロココワラケ
SK 3	中世14C後半	円形 径1.40m 深さ0.80m		古瀬戸瓶子
SK 5		長方形 1.30×0.90m 深さ30cm		
SK 6		長方形 1.00×0.70m 深さ40cm		
SD 1	中世15世紀	直線 上幅10.90m 底幅8.90m 深さ80cm		ロココワラケ 在須すり鉢 瓦質すり鉢 瓦質風炉 酸化内耳 青磁碗 白磁皿 古瀬戸天目 珠洲燗 硯
SD 2		直線 上幅0.70m 底幅0.40m 深さ30cm		
SD 4	中世	直線 上幅1.20m 底幅0.40m 深さ15cm		青磁碗
SD 5		直線 上幅0.90m 底幅0.50m 深さ10cm		
SD 6	近世	直線 上幅0.45m 底幅0.20m 深さ12cm		伊万里瓶

表6 V区検出遺構一覧表

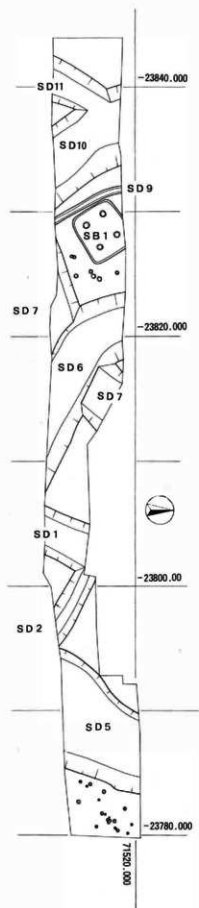
VI区の調査概要

主郭南端を東西に貫く調査区で、上下2面にわたる遺構面を検出しているが、上層は、柱穴群を確認したのみで、明確な建物の配列関係を把握するにはいたっていない。

下層は、古墳時代の住居址1軒、環濠と思われる溝2条、中世の溝6条を確認している。SD7・10は古墳時代前期の環濠と考えられる溝で、同時期の住居址SB1を取り囲むように方形に屈曲する。SD1～SD5・SD6・SD11は中世の溝址である。いずれも複雑な様相を呈しているが、出土遺物の時代的判断から、SD1と

遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等
SD 1	中世14C後～15C前	直線 上幅3.70m 底幅2.10m 深さ51cm		ロココワラケ 酸化内耳 珠洲壺 瓦質風炉
SD 2	中世14C後～15C前	直線 上幅2.20m 底幅0.70m 深さ49cm		青白磁合子蓋 青磁碗 酸化内耳 硯
SD 3	中世14C後～15C前	直線 規模不明 深さ27cm		
SD 5	中世14C後～15C前	直線 上幅7.00m 底幅5.10m 深さ80cm		ロココワラケ 瓦内耳 酸化内耳 香炉 青磁碗 白磁皿 古瀬戸天目 古瀬戸燗台 珠洲すり鉢
SD 6	中世14C後～15C前	上幅5.60m 底幅2.90m 深さ94cm		ロココワラケ 在須すり鉢 瓦内耳 青磁碗 古瀬戸 常滑三筋壺 珠洲すり鉢 石鉢
SD 7	古墳前期	方形 上幅4.90m 底幅3.10m 深さ51cm		土師器壺 壺
SD 9		直線 上幅0.60m 底幅0.30m 深さ15cm		
SD10	古墳前期	方形 上幅5.20m 底幅3.10m 深さ84cm		土師器壺 壺 高坏
SD11	中世14C後～15C前	直線 上幅2.90m 底幅1.50m 深さ80cm		ロココワラケ 在須すり鉢 瓦質内耳 青磁碗 白磁皿 珠洲
SB 1	古墳前期	隅丸方形 4.20×4.00m		土師器壺 高坏

表7 VI区検出遺構一覧表



第16图 VI区全体图 (1 : 300)



VI区



VI区 6号沟址

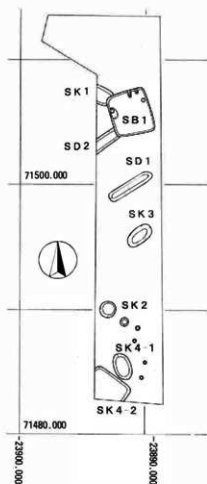
遺構名	時代・時期	平面形・規模等	施設	出土遺物等
SK 1	平安	長円形 ? × 1.10m 深さ30cm		
SK 2	平安	円形 径1.30m 深さ40cm		石鉢
SK 3	平安	長円形 2.20 × 1.20m 深さ30cm		
SK 4-1	平安	長円形 2.20 × 1.40m 深さ25cm		
SK 4-2	平安	隅丸方形 一辺3.20m 深さ20cm		
SD 1	平安	長さ4m 上幅0.80m 底幅0.50m 深さ30cm		
SD 2	平安	上幅0.90m 底幅0.50m 深さ30cm		
SB 1	平安	隅丸方形 3.60 × 3.20m	土カマド	土師器甕 坏 須恵器坏

表 8 VII区検出遺構一覧表

SD 6、SD 5とSD 11がそれぞれ関連するものであるとすれば、主郭中央部のⅠ・Ⅴ区で堀とSD 1によって想定された50m四方におよぶ方形の区画とは別に、それとは主軸をやや異にして、二重に方形に区画された区域の存在を想定することも可能であるが、いずれにせよ、限られた調査範囲からは詳細は不明といわざるをえない部分が多い。調査区両端は遺構の分布密度が次第に希薄となり、漸移的に低湿地帯へと移行していくようである。

VII区の調査概要

平安時代の住居址・土壇・溝などを検出している。Ⅲ区などで検出された平安期の遺構群とは異なり、むしろ、Ⅳ区で検出された、Ⅳ区西端付近からより西南方に展開する微高地の一端が本調査区付近まで延びてきているものかと判断される。



第17図 VII区全体図 (1 : 300)



第4章 調査

第1節 弥生時代

今回の調査では、明確に弥生時代と断定できる遺構は確認されていないが、若干の土器、石器、装身具類が採取されている。これらはいずれも検出面や、時期の異なる遺構に混入した形で採取されている。

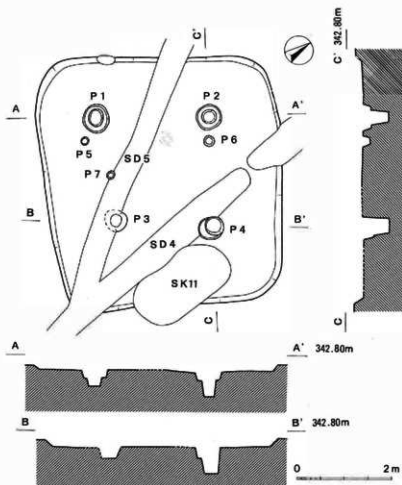
第19図1はI区P50より出土したもので、小型の台付広口壺である。胴部は球形に強く張り、口縁部は短く外反するが、頸部外面は接合痕をそのまま段状に残して、複合口縁状を呈する。口縁直下には二個一對の緊縛孔を穿孔している。外面ならびに口縁部内面は磨き・赤彩される。胴部内面は剥落のため詳細不明である。口径10.0cm、胴最大径11.4cmを測る。弥生時代後期・箱清水式期のもと考えられるが、口頸部の形状など類例がなく、あるいは時期的に新しいものである可能性もある。(2・3)はともにII区検出面出土のもので、(2)は高坏口縁部破片で内外面ともに磨き・赤彩され、口径は20.6cmを測る。(3)は坏もしくは片口の口縁部破片と考えられ、口縁部は屈曲して立ち上がる形状を示す。内外面ともに磨き・赤彩され、口径は17.0cmである。ともに弥生時代後期箱清水式期の所産である。(4~20)には拓影を示した。いずれも弥生時代後期・箱清水式土器の破片である。(9)は壺頸部の破片で2本一對の櫛描T字文が認められる。その他のものは甕で、櫛描波状文ならびに縷状文が認められる。(7・10・13・15・17)などは口縁部破片であるが、口唇部はいずれも面取り、もしくはつまみ上げぎみに強く横ナデされ、箱清水式でも新しい時期の特徴を示す。

(21)はVI区SD11より出土した小型の扁片刃石斧である。蛇紋岩製で長さ3.6cm、刃部幅2.5cm、厚さ0.5cmを測る。刃部の側面を一部欠損するがほぼ完形品である。弥生時代中期・栗林式期の所産であろう。(22)はII区検出面より出土した小型の勾玉で、瑪瑙製である。長さ1.4cm、厚さ0.4cmを測り体部は扁平である。(23)はII区検出面より出土した緑色凝灰岩製の管玉である。1/3ほどを欠損するが、残存長3.0cm、径1.0cmを測る。穿孔は両側から行われている。

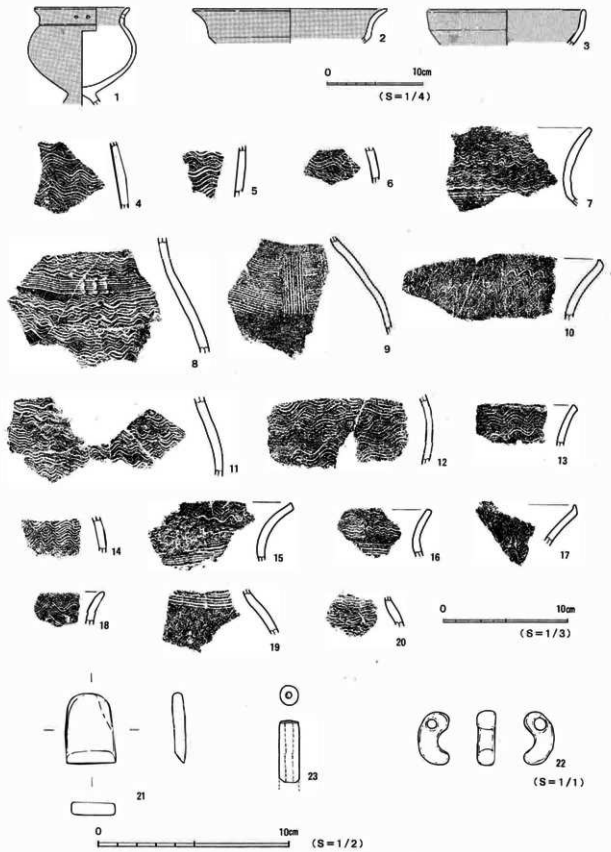
第2節 古墳時代

II区(下層)1号住居址(第18図)

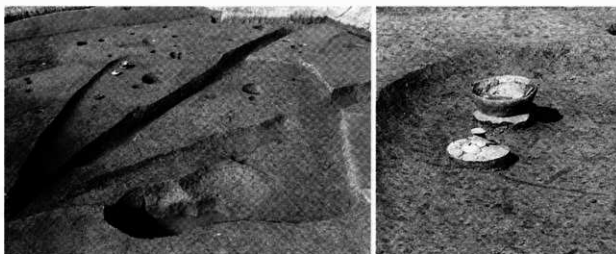
II区下層より検出された住居址で、上層を中世のSD4・5やSK11に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は5.20m×5.00mを測る。確認面からの掘り込みは平均20cm前後で、床面は地山を掘り抜いている



第18図 II区(下層)1号住居址実測図(1:80)



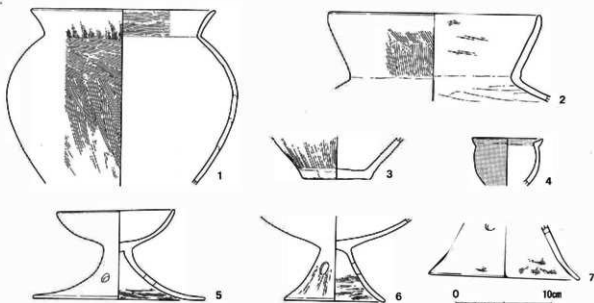
第19図 弥生時代遺物実測図ならびに拓影



Ⅱ区（下層）1号住居址ならびに土器出土状況

ため色調は明瞭であったが、全体に軟弱で、貼り床や硬化面などは確認されていない。主柱穴はP1～P4の4本方形配列と考えられ、柱穴間の距離は2.30×2.20mを測る。この他にP5～P7の小支柱が検出されているが本住居址に伴うものかは不明である。炉はP1・P2間中央や内寄りに位置する径20cmほどの地床炉で、5cmほどの掘り込みを有し、炉底面は熱変を受け赤化していた。床面より若干浮いて状態で、甕(1)と高坏(5)が出土している。

出土遺物には甕(第20図1～3)・鉢(4)・小型高坏(5)・高坏(6・7)がある。甕(1)は口縁部がくの字状に外反し胴上部が強く張る。胴外面と口縁部内面は刷毛整形され他はナデで仕上げられる。口径19.4cm。甕(2)は口縁部が直立ぎみに長く立ち上がり端部にて若干内湾ぎみに屈曲する。外面は刷毛後ナデ。内面口縁部は刷毛後縦磨き、胴部は篋削りで仕上げられる。形態ならびに口縁部内面の調整より、弥生後期箱清水式の伝統を存させる甕といえよう。口径22.4cm。(4)は小型の鉢で口縁部が短く外反する。内外面ともナデで仕上げられ、赤彩される。口径7.4cm。小型高坏(5)は口径12.6cm・脚径18.4cm。内外面とも磨きによって仕上げられ、脚部には円形透孔を3個有する。高坏(6)は脚径10.6cm。高坏(7)は脚径16.0cmを測りともに円形透孔を有する。出土土器より本住居址は古墳時代前期初頭の所産ととらえられる。



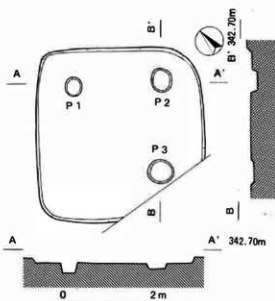
第20図 Ⅱ区（下層）1号住居址出土土器実測図（1：4）

Ⅲ区 2号住居址 (第21~22図)

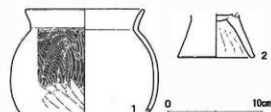
Ⅲ区北側で検出された住居址で、他遺構との切り合いはないが、南隅が一部調査区外となる。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は3.70m×3.60mを測る。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、掘り込みはゆるやかで、床面の状況も全体に軟弱で不明瞭なものであった。柱穴はP1~P3の3本しか検出されておらず、本遺構を住居址と判断する積極的根拠は存在しない。

出土遺物には甕(第22図1)ならびに台付甕脚部(2)がある。甕(1)は、口縁部が短くくの字状に外反する形態を呈し、口縁部は強い横ナデ、胴部上半は縦~斜め方向の刷毛整形、胴下半は刷毛整形後雑な筥削りがなされる。また内面は全体に丁寧なナデ整形される。口径12.6cm。台付甕脚部(2)は脚径8.3cmを測る。外面は縦筥削り、内面はナデによって仕上げられ、脚部端面は面取りされる。

本遺構を住居址とは判断し兼ねるが、出土土器の様相より、古墳時代前期の所産ととらえられよう。



第21図 Ⅲ区 2号住居址実測図(1:80)



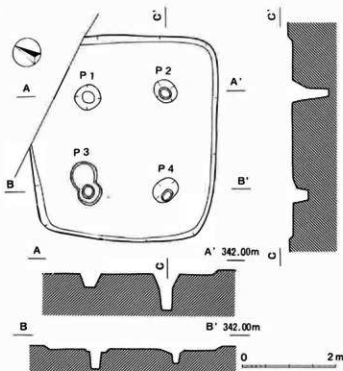
第22図 Ⅲ区 2号住居址出土土器実測図(1:4)

Ⅵ区 1号住居址 (第23~24図)

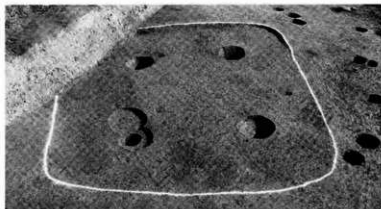
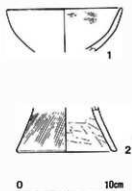
Ⅵ区下層より検出された住居址で、北隅が一部調査区外となる。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は4.40m×3.90mを測る。確認面からの掘り込みは平均10cm以下と浅く、かろうじて壁の立ち上がりを確認した。床面は全体に軟弱で、張り床や硬化面は確認していない。柱穴はP1~P4が検出されており、4本方形の支柱穴配置となる。柱穴間の距離は1.60m×2.00mを測る。炉やその他の施設は確認されていない。

出土土器は小型高坏(第24図1)と台付甕脚部(2)がある。いずれも小破片で詳細は不明であるが、(1)は内外面とも雑な筥磨きで仕上げられ口径12.3cm。(2)は外面が斜刷毛、内面が筥削りで仕上げられ、脚径10.6cmを測る。

出土土器の様相より本住居址は古墳時代前期の所産と考えられる。



第23図 Ⅵ区 1号住居址実測図(1:80)



第24図 VI区1号住居址出土土器実測図

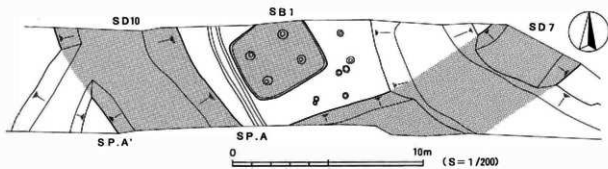
VI区環濠 (SD7・10) (第25~27図)

VI区で検出されたSD7・10は、1号住居址を方形に取り囲むような状況で検出されており、その規模・形態、ならびに出土遺物より同一の溝跡と判断され、なおかつ時代背景からは、環濠としての機能を有していたものと判断される。調査区の関係からともにその一部を確認したにすぎず、また他の調査区ではこれに類似する溝跡も検出されていないため、環濠自体の全体的な規模を推定するにはいたっていない。SD7は中世の溝址SD6に切られ、またSD10は同様に中世の溝址SD11に切られる。SD7は北東から南西方向へ直線的に伸び、長さ約11mほどを検出した。確認面での上幅4.60~5.00m、溝底幅平均3.00mを測る。断面はゆるやかな逆台形状を呈し、確認面からの掘り込みは0.90~1.00mを測る。SD10は北西から南東方向へ直線的に伸び、長さ約6mほどを検出した。確認面での上幅約5.50m、溝底幅平均3.00mを測る。断面はゆるやかな逆台形状を呈し、確認面からの掘り込みは0.80~0.90mを測る。第26図にSD10南壁の土層堆積状況を示したが、基本的に自然埋没している様相が伺われる。

VI区1号住居址



環濠 (SD7・10)



第25図 VI区環濠 (SD7・10) ならびに1号住居址実測図 (1:200)



環濠 (SD7) 南壁



SD7 土器出土狀況



環濠 (SD7) 北壁



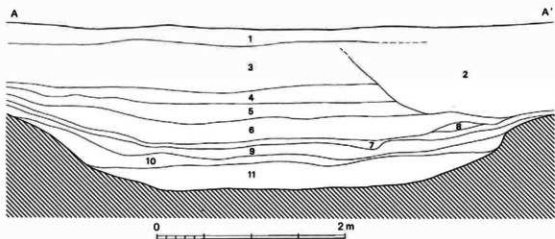
SD7 土器出土狀況



SD7 土器出土狀況

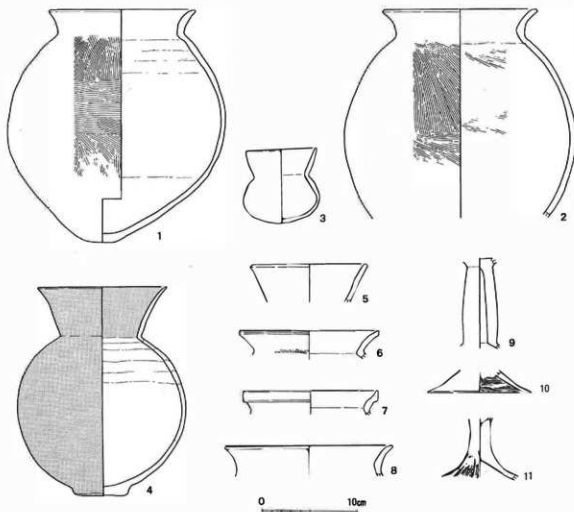


環濠 (SD10)



1. 耕作土 2. 覆土 3. 暗褐色粘質土 4. 暗黃褐色粘質土 5. 黑褐色粘質土 6. 暗褐色粘質土
7. 黑褐色粘質土 (炭化物多含) 8. 明褐色粘質土 9. 暗褐色粘質土 10. 灰褐色粘質土 11. 暗青灰色粘質土

第26圖 VI区環濠 (SD10) 南壁土層堆積狀況實測圖 (1:40)



第27圖 VI区環濠 (SD7·10) 出土土器實測圖 (1:4)

出土土器のうち図示し得たものには第27図1～11があるが、1～4はSD7、5～11はSD10からの出土である。甕(1)は丸底で、口縁は短く外反して終わる。口縁部は内外面ともに強く横ナデされ、胴部外面は刷毛、胴部下半は篋削りで仕上げられる。口径15.5cm、器高24.6cm。甕(2)は底部を欠損する。球形の胴部に短く外反する口縁部がつく。口縁部は内外面ともに横ナデされ胴部外面は刷毛、胴部下半は篋削りで仕上げられる。口径16.4cm。小型丸底埴(3)は扁球形の体部にやや内湾しつつも直立ぎみに長く伸びる口縁を有する。口縁部内外面ならびに胴部上半は篋磨き、胴部下半は篋削りで仕上げられる。口径5.6cm、器高7.8cm。直口壺(4)は球形の胴部に外反しつつ長く伸びる口縁がつき、底部はやや突出する。外面ならびに口縁部内面は篋磨き・赤彩され、胴部内面は全体にナデ整形されるが、上半には粘土帯の接合痕を顕著に残す。口径13.8cm、底径5.8cm、器高22.1cm。直口壺(5)は口縁部破片であるが、外反しつつ立ち上がり、口唇部は面取りされる。内外面ともに篋磨きで仕上げられる。口径12.5cm。甕(6)短く、くの字状に口縁が外反し、口唇部にはつまみ上げ状の強い横ナデが施される。口縁部は内外面とも横ナデされ、胴部には刷毛が認められる。口径14.8cm。甕(7)は口縁端部が粘土帯貼りつけによる複合口縁をなす。摩耗のため調整等不明。口径14.2cm。甕(8)は短くゆるやかに外反する口縁をなし内外面ともにナデ整形される。高坏(9)は脚部破片であるが、中空の長めの脚部で、脚部破片(10)とともに、屈折脚高坏の初源の様相を示す。(10)の脚径は11.2cmを測り、外面は篋磨き、内面は刷毛で仕上げられる。高坏(11)は外面は刷毛後篋磨き、内面はナデで仕上げられる。

以上出土土器の様相からは一部混入と思われるものもあるが、おおむね古墳時代前期の中でとらえられるものであろう。

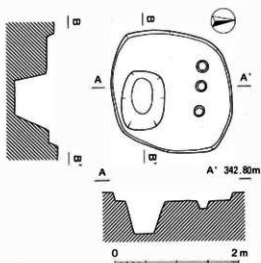
I区SK4号土壌(第28・29図)

I区で検出された土壌で、径1.90mほどのやや不整な円形を呈する。内部には三つの小ピットと0.90×0.70m、深さ約50cmの掘り込みを有し、この掘り込み内より第29図に示した土器が出土している。三つのピットが本遺構に伴うものであるかは不明である。出土土器には甕口縁部破片が2点ある。(1)は口縁部がゆるやかに外反し、外面は刷毛後ナデ整形され、内面頸部には指頭押捺痕を顕著にとどめる。口径12.2cm。(2)は口縁部が鋭く、くの字状に外反する形態を呈し、口縁部は内外面ともに強く横ナデされ、胴部外面は刷毛整形、内面は篋による平滑化がなされる。

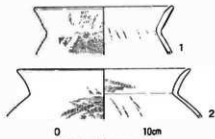
出土土器の様相より古墳時代前期の所産と考えられる。

V区土器集中遺構(第15・30図)

V区にて検出されたもので、溝状の不定形な落ち込み内から、古墳時代の土器が比較的集中した状況で検出されたもので、溝状遺構ととらえるべきかも知れないが、掘り込みも平均5cmと浅く不明瞭であり、一応土器集中遺構としてとらえておく。北西から南東方向へ伸びる溝状の落ち込みで約7mほどを検出した。掘り込みの深さは平均5cm前後で、覆土上層から破片を中



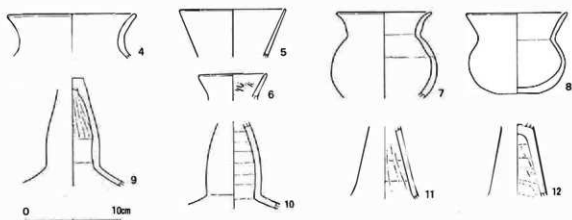
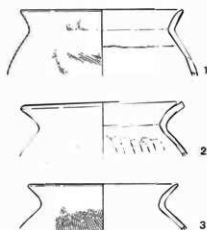
第28図 I区SK4号土壌実測図(1:60)



第29図 I区SK4号土壌出土土器実測図



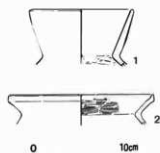
V区土器集中遺構



第30図 V区土器集中遺構出土土器実測図(1:4)

心とした土器群が比較的集中して出土している。出土土器には甕(1~4)、直口壺(5)、小型丸底埴(6)、小型壺(7・8)、高坏(9~12)がある。

(1)は口縁部が短くくの字状に屈曲し、口縁部は横ナデ、胴部は刷毛整形。口径17.2cm。(2)は頸部のくびれが強く、また口唇部は面取りされる。摩耗のため詳細不明だが内面頸部付近は指頭押捺痕を顕著にとどめる。口径17.3cm。(3)は口縁部が強く外反し、口縁部は横ナデ、胴部は刷毛で仕上げられている。口径15cm。甕(4)は頸部のくびれが弱い形態で口径13.8cm。直口壺(5)は口縁部破片だが内外面とも磨きで仕上げられる。小型壺(7)は口縁下位に若干の段を有して口縁部が外反する。外面は丁寧に笕磨きされる。口径10.0cm。(8)は扁球形の体部にくの字状に外反する口縁部がつく小型壺で、口縁部~胴上半は笕磨き、胴下半は笕削り後磨かれる。口径10.7cm、器高8.6cm。以上出土土器の様相より、本遺構は古墳時代中期の所産ととらえられる。



遺構外出土遺物(第31図)

遺構外から出土した遺物として第31図に土器2点と白玉を示した。(1)は

第31図 遺構外出土古墳時代遺物実測図

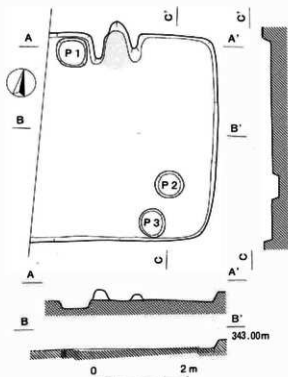
直口壺で、口縁はやや内湾ぎみに立ち上がり、内外面とも丁寧な篋磨きで仕上げられる。また、内面頸部には篋削り痕が認められる。口径11.0cm。(2)は甕口縁部破片で、口縁端部は強い横ナデによって受け口ぎみに立ち上がる。外面は横ナデ、内面は刷毛によって仕上げられる。口径15.4cm。白玉(3)は滑石製で、径0.7cm、厚さ0.5cmを測る。中央部が算盤玉状に強く張り、白玉の初原的な様相を示すものととらえられよう。

第3節 平安時代

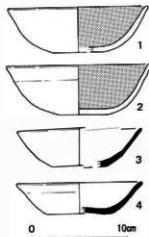
IV区1号住居址 (第32~34図)

IV区西端で検出された住居址で西側は、1/4ほどが調査区外となる。平面プランは一辺4.30m程の隅丸方形を呈する。カマドは北壁中央付近に位置し、袖部ならびに燃焼部を確認している。床面は全体に軟弱で不明瞭であるが壁の掘り込みはしっかりしている。カマド西側に位置するP1は深さ15cm程であるが、貯蔵穴的な性格がうかがえる。住居址南側にP2・3を検出しているが、性格不明である。

出土土器には内面黒色処理された土師器杯(1・2)、須恵器杯(3・4)、土師器高台付杯(5)、土師器羽釜(11)などがある。いずれも覆土上層からの出土で、明確な時期比定は困難であるが、須恵器杯や黒色処理土師器の残存、また土師器甕の様相などより、羽釜を混入と考えるならば、10世紀後半段階の所産かと想定される。



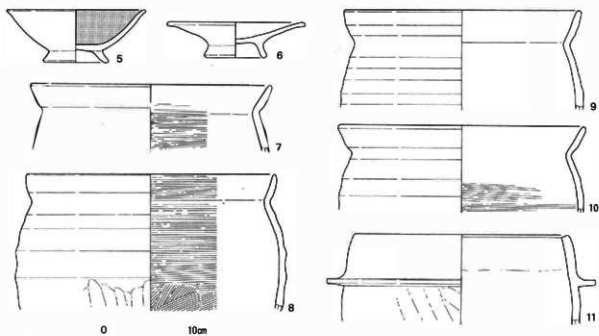
第32図 IV区1号住居址実測図(1:80)



第33図 IV区1号住居址出土土器実測図①



IV区1号住居址

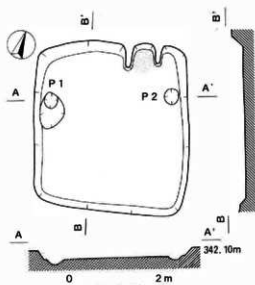


第34図 IV区1号住居址出土土器実測図②(1:4)

Ⅶ区1号住居址(第35・36図)

Ⅶ区北側で検出された住居址で、3.60×3.30m程の隅丸方形プランを呈する。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであったが、確認面からの掘り込みは平均20cm程としっかりしている。北壁東側に偏った部分に若干のカマド袖部分と燃焼部を確認している。壁際にP1・P2の二つの小ピットを検出しているが、掘り込みは不明瞭なものである。

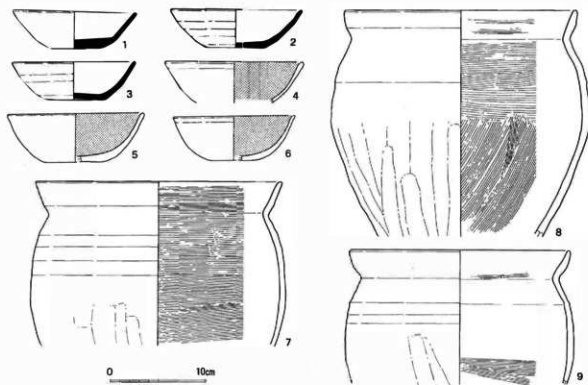
出土土器には、須恵器坏(1~3)、内面黒色処理された土師器坏ならびに土師器甕(7~9)が出土している。詳細は不明であるが10世紀代の所産と考えられる。



第35図 Ⅶ区1号住居址実測図(1:80)



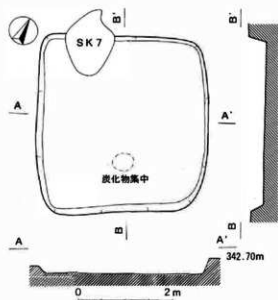
Ⅶ区1号住居址



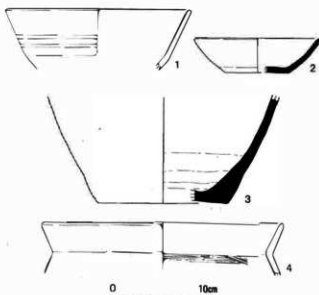
第36図 VII区1号住居址出土土器実測図(1:4)

III区1号住居址(第37・38図)

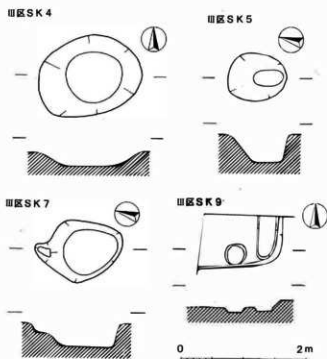
SK7号土壌に上層を切られる。3.70×3.60mの隅丸方形プランを呈する。確認面からの掘り込みは平均30cm程を測るが、床面は軟弱で不明瞭であった。カマドの痕跡や柱穴などの諸施設は確認されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はないが、南側の床面上に一部炭化物の集積が認められた。出土土器には、土師器環(1)、須恵器環(2)、須恵器甕(3)、土師器甕(4)がある。



第37図 III区1号住居址実測図(1:80)



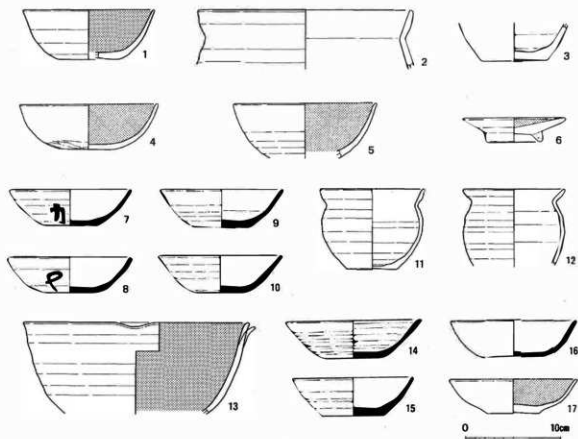
第38図 III区1号住居址出土土器実測図(1:4)



第39图 平安時代土坑実測図 (1:60)



III区SK 7号土坑土器出土状況



第40图 III区SK 7号土坑出土土器実測図 (1:4)

第4節 中世

I区 堀 (第41・50・52図)

十分な調査面積が確保できなかった関係より、今回の調査は重機を援用してトレンチを掘削し、セクション面の観察から、その規模を確認するにとどまった。

確認された上面での幅は12.60m、底面での幅は約8.20m、深さは平均1.00m前後である。断面はゆるやかな逆台形状を呈する。調査前の旧地形の状況からは、主郭周辺を低湿地帯がぐるっと取り巻く状況が観察されたが、調査の結果、V区のSD1とはほぼ平行し、ほぼ50m四方の方形区画としてとらえられることが判明した。時期的には15世紀後半を中心とするようである。出土遺物には、ロクロカワラケ (第52図52~54)、酸化炎焼成内耳鍋 (58)、古瀬戸後期様式IV期鉢 (55)、珠洲甕 (55~59)、石臼 (第61図1)、五輪塔 (第64図15)、凹石 (16・17) などが出土している。

I区SK1 (第42図)

二段にわたる掘り込みを有する円形の土壌で1.00×1.05mの規模である。確認面からの掘り込みは63cmを図る。ロクロカワラケ (第51図14・15) が出土しており、14世紀後半前後の所産と考えられる。



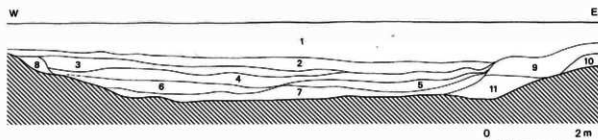
I区堀 調査前の状況

I区SK6 (第42図)

SK5と重複するために、平面形は不明であるが、1.75×1.25m程の長円形を呈するものと考えられ、深さは25cmを測る。ロクロカワラケ (第51図16)、在地産須恵質すり鉢 (17) が出土しており、14世紀後半前後の所産と考えられる。

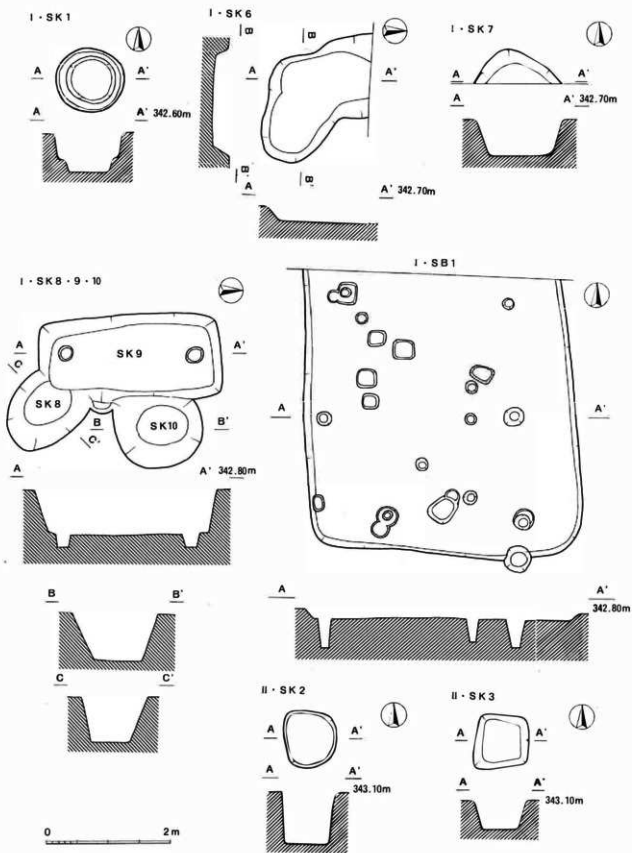


I区堀 西側立ち上がり



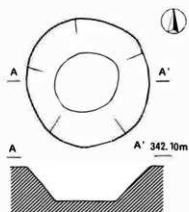
- 1層 耕作土(水田耕土) 2層 暗青灰色粘質土(白色粘土ブロック混) 3層 暗青灰色粘質土(白色粘土ブロック混)
4層 暗青灰色粘質土(炭化物混) 5層 暗青灰色粘質土(砂混) 6層 暗青灰色粘質土(炭化物混)
7層 淡黒色腐植土層 8層 暗褐色粘質土 9層 淡褐色粘質土 10層 淡青灰色粘質土 11層 暗青灰色粘質土

第41図 I区堀土層堆積状況実測図 (1:80)

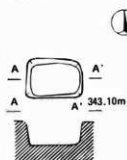


第42图 中世土坑等实测图① (1:60)

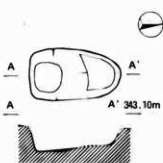
II · SK 1



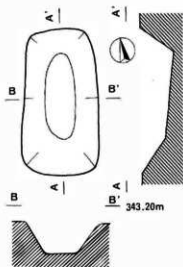
II · SK 4



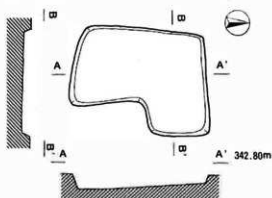
II · SK 5



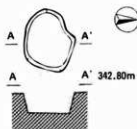
II · SK 6



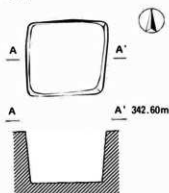
II · SK 12



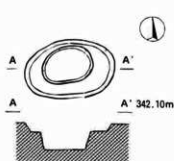
II · SK 17



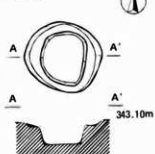
V · SK 1



V · SK 3



V · SK 2



第43图 中世土壇等実測図② (1 : 60)

I区SK7 (第42図)

1/2以上が調査区外となり詳細不明であるが、方形もしくは隅丸方形を呈する土坑で、深さは57cmを測る。ロクロカワラケ (第51図18)、越前甕 (19)、在地産須恵質すり鉢 (20) が出土しており、14世紀後半後の所産と考えられる。



I区 SK8・9・10

I区SK8 (第42図)

SK9を切って構築される長円形の土坑で、(1.50)×1.10m程の規模と考えられ、深さは74cmを測る。ロクロカワラケ (第51図21~23)、珠洲IV期甕 (24) が出土しており、15世紀代の所産と考えられる。



I区 SB1周辺

I区SK9 (第42図)

SK10を切って構築され、SK8に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は2.95×1.35mである。深さ91cmを測る。底面壁際に深さ20cm程の小ピットが2個検出されている。ロクロカワラケ (第51図25~30)、在地産須恵質すり鉢 (31)、瓦質すり鉢 (32)、酸化炭焼成内耳鍋 (33)、古瀬戸即血 (34) が出土しており、15世紀代の所産と考えられる。



I区 SD4

I区SK10 (第42図)

SK9に切られる円形の土坑で、径1.45m、深さ79cmを測る。ロクロカワラケ (第51図35・36)、珠洲甕 (37) を出土しており、14世紀後半後の所産と考えられる。

I区SB1 (第42図)

隅丸長方形の平面プランを呈する堅穴状遺構であるが、確認面からの掘り込みも平均15cm前後と浅く性格不明である。内部に柱穴が多数検出されているが、本遺構に直接伴うものかは不明である。規模は(4.50)×4.30mを測る。カワラケや在地産須恵質すり鉢の小破片が出土しているが、時期等詳細は不明である。

I区SD3 (第8図)

南北方向に直線的に延びる溝で、上幅平均50cm、底幅平均30cm、深さ平均10cmを測る。15世紀前後の白磁皿破片 (第51図45) が出土しているが、時期等詳細は不明である。

I区SD4 (第9図)

北東から南西方向に直接的に延びる溝址で、上幅平均1.20m、底幅平均50cm、深さ平均47cmを測る。瓦質すり鉢破片(第51図46)が出土しているが、時期等詳細は不明である。

I区SD5 (第9図)

北西隅でほぼ直角に屈曲する溝址であるが、南側は調査区外、東側は掘り込みが不明瞭で、詳細不明である。上幅平均80cm、底幅平均50cm、深さ平均14cmを測る。ロココワラケ(第51図47)、在地産須恵質すり鉢(48・49・51)、古瀬戸前期様式瓶子(50)が出土しており、14世紀後半前後の所産と考えられる。

II区SK1 (第43図)

円形土壌で、径2.10m、深さ64cmを測る。ロココワラケ(第52図73~75)、龍泉窯系蓮弁文青磁駒(76)が出土しているが、時期等詳細は不明である。

II区SK2 (第10図)

SD1を切って構築された土壌で、不整形を呈する。規模は0.90×0.85m、深さ40cmを測る。焼物類の出土はないが、石鉢(第63図8)が出土している。時期等詳細は不明である。

II区SK3 (第10図)

方形の土壌で、規模は0.85×0.85m、深さ46mを測る。ロココワラケ(第52図77・78)、在地産須恵質すり鉢(79)、珠洲壺(80)、珠洲Ⅲ~Ⅳ期のすり鉢(81)、酸化炭焼成内耳鍋(82)や、古銭(第65図1)が出土している。



II区SK4 (第43図)

隅丸長方形の平面プランを呈し、規模は0.90×0.65m、深さ35cmを測る。焼物類の出土はないが、覆土上層より古銭(第65図2~9)が集中して出土している。あるいは墓塚の可能性が考えられるのかも知れない。時期等詳細は不明。



II区SK5 (第43図)

二段にわたる掘り込みを有する。平面不整形を呈する土壌で、規模は1.50×0.85m、深さ52cmを測る。珠洲Ⅳ期の壺(第52図84)が出土しており、14世紀以後の所産と考えられる。

II区 SK12・13・14

Ⅱ区SK6 (第43図)

隅丸長方形を呈する土壌で、規模は2.35×1.25m、深さ38cmを測る。ロココワラケ (第52図85～88) を出土しているが、時期等詳細は不明である。

Ⅱ区SK12 (第43図)

不整形な方形土壌で、規模は2.20×1.70m、深さ24cmを測る。ロココワラケ (第52図95) が出土しているが時期等詳細は不明である。

Ⅱ区SK17 (第43図)

不整形な円形土壌で、規模は1.00×0.80m、深さ30cmを測る。ロココワラケ (第52図96) が出土しているが、時期等詳細は不明である。

Ⅱ区SD1 (第11図)

北西から南東方向に直線的に延びる溝址で、SK2に切られ、SD2と切り合う。上幅平均1.00m、底幅平均0.40m、深さ平均30cmを測る。ロココワラケ (第53図97・98)、酸化炭焼成内耳鍋 (100～103)、珠洲甕 (99) が出土しており、15世紀以降の所産と考えられる。

Ⅱ区SD4 (第11図)

南北方向へ直線的に延びる溝址で、SB1号住居址を切り、またSD5と切り合う。上幅平均0.70m、底幅平均0.30m、深さ平均16cmを測る。酸化炭焼成内耳鍋 (第53図107) が出土しており、15世紀以降の所産と考えられる。

Ⅱ区SD5 (第11図)

北西から南東方向へ直線的に延びる溝址で、SB1号住居址を切る。上幅平均0.50m、底幅平均0.20m、深さ平均29cmを測る。ロココワラケ (第53図108・109)、在地産須恵質すり鉢 (110・112)、古瀬戸後期様式Ⅱ期頃の卸皿 (111)、珠須Ⅱ～Ⅲ期の壺 (113) が出土しており、14世紀代の所産と考えられます。

Ⅱ区SD10 (第11図)

東西方向に直線的に延びる溝址で、上幅平均1.70m、底幅平均0.90m、深さ平均62cmを測る。ロココワラケ (第53図114～118)、在地産須恵質すり鉢 (119) が出土しており、14世紀代の所産と考えられる。



Ⅱ区SD10

V区SK1 (第43図)

方形の土壌で、規模は1.30×1.20m、深さ1.50mを測る。覆土上層～中層にかけて、拳大～人頭大の川原石が一括投棄されたような状況で出土しており、石臼の破片も混じっていた。15世紀前半の腰の張るタイプの青磁碗



V区SK1



V区SK1石白出土状況

(第54図198) が出土しており、15世紀代の所産と考えられる。

V区SK2 (第43図)

二段にわたる掘り込みを有する円形土坑で、規模は径1.20m、深さ80cmを測る。ロクロカワラケ (第54図200・201)、瓦質土器香炉 (199)、酸化炭焼成内耳鍋 (202)、龍泉窯系蓮弁文青磁碗 (203・204) を出土しており、15世紀代の所産と考えられる。



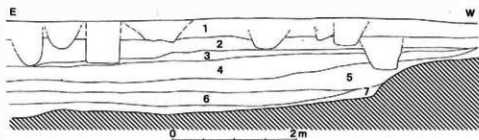
V区土坑・柱穴群

V区SK3 (第43図)

二段にわたる掘り込みを有する円形土坑で、規模は径1.40m、深さ80cmを測る。底面は拳大〜人頭大の川原石が投棄された状況で出土している。外面に印刻花文を施す古瀬戸中期様式の瓶子 (第55図205) が出土しており、14世紀前半代の所産と考えられる。



V区SK3



1. 黒灰色砂質土層 2. 黄褐色砂質土層 3. 黄灰色砂質粘土層 4. 灰褐色砂質粘土層
5. 黄灰褐色砂質粘土層 6. 灰褐色粘質土 7. 灰褐色砂質粘土層

第44図 V区SD1土層堆積状況実測図 (1:60)

V区SD1 (第15・44図)

南北方向に直線的に延びる溝址で、上幅平均10.90m、底幅平均8.90m、深さ平均80cmを測る。I区で検出された堀とほぼ平行しており、両者によって取り囲まれたほぼ50m四方の方形区画の存在が想定されている。

ロココワラケ(第55図206・229)、雷文帯をもつ青磁碗(230)、細線蓮弁文青磁碗(231)、白磁皿(232)、青花皿(233)、古瀬戸後期様式天目茶碗(234・236)、珠洲IV期壺(243・244)、珠洲壺(245・248)、越前壺(249)、在産瓦質風炉(250・251)、酸化炎焼成内耳鍋(252・258)などが出土しており、15世紀代の所産と考えられる。また硯(第64図18)も覆土下層より出土している。



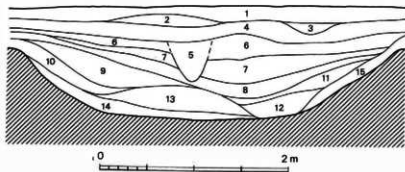
V区SD1

V区SD4 (第15図)

北東から南西方向へ直線的に延びる溝址で、上幅平均1.20m、底幅平均0.40m、深さ平均15cmを測る。SD4以東は漸移的に低湿地へと移行して行く状況が観察され、SD4が何からの境界的な役割をもっていた可能性も想定される。12世紀後半の安楽系青磁碗(259)が出土しているが、時期等詳細は不明である。

VI区SD1 (第16・45図)

北東から南西方向に延びる溝址で長さ3m程を検出したにすぎないが、上幅平均3.70m、底幅平均2.10m、深さ平均51cmを測る。SD6と同一の溝址とすれば、I・V区で想定された50m四方の方形



1. 耕作土 2. 暗褐色砂質土 3. 暗褐色砂質土 4. 黄褐色砂質土 5. 黒褐色砂質土
6. 灰褐色粘質土 7. 黄灰褐色粘質土 8. 黄褐色砂質土 9. 黒灰色粘質土 10. 黄灰褐色粘質土
11. 黄灰褐色粘質土 12. 暗褐色粘質土 13. 黒灰色粘質土 14. 暗褐色粘質土 15. 暗褐色粘質土

第45図 VI区SD1土層堆積状況実測図(1:40)

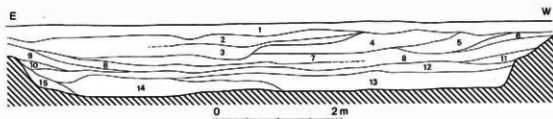
区画とは別に、二重に方形に区画された区域の内側の区画と想定することも可能である。ロココワラケ(第57図316~325)、酸化炎焼成内耳鍋(315)、珠洲壺(314)、瓦質風炉(326)が出土しており、14世紀後半~15世紀前半頃の所産と考えられる。

VI区SD2 (第16図)

北西から南東方向へ直線的に延びる溝址で、SD1やSD5と直交するが、切り合いの前後関係等は不明である。上幅平均2.20m、底幅平均0.70m、深さ平均49cmを測る。ロココワラケ(第57図327~329・331)、酸化炎焼成内耳鍋(333)、青白磁の合子蓋(330)、



VI区SD1



1. 耕作土 2. 灰黄褐色砂質粘土 3. 灰褐色粘質土 4. 灰黄褐色砂質粘土 5. 灰褐色砂質粘土
 6. 黄褐色粘質土 7. 灰黄色粘質土 8. 暗褐色粘土 9. 灰黄褐色粘質土 10. 灰褐色砂層
 11. 灰褐色砂層 12. 暗青灰色粘土層 13. 暗青灰色粘土層 14. 暗青灰色粘土層 15. 暗青灰色砂質粘土

第46図 VI区SD5土層堆積状況実測図(1:60)

外反口縁の青磁碗(332)が出土しており、14世紀後半～15世紀前半代の所産と考えられる。

VI区SD5 (第16・46図)

北東から南西方向へ直線的に延びる溝址で、約7m程を検出している。上幅平均7.00m、底幅平均5.10m、深さ平均80cm程を測る。VI区SD11と関連するものであるとすれば、二重に方形に区画された外側の区画として把握することも可能である。

ロッコワラケ(第58図334～373)、瓦質内耳鍋(390・391)、酸化炎焼成内耳鍋(392)、同土器香炉(393)、龍泉窯系画花文青磁碗(374)、同蓮弁文青磁碗(375・376・379)、外反口縁青磁碗(377)、白磁小皿(380)、古瀬戸燭台(385)、珠洲すり鉢(387・289)などが出土しており、14世紀後半から15世紀前半の所産と考えられる。

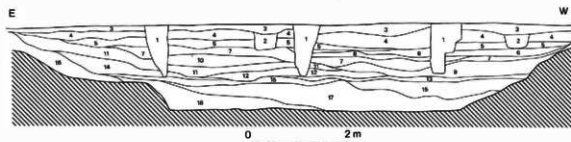
また石鉢(第64図13・14)や砥石(24・26)も出土している。



VI区SD5



VI区SD5土層堆積状況



1. 攪乱 2. 攪乱 3. 耕作土 4. 暗褐色粘質土 5. 暗褐色粘質土 6. 暗褐色粘質土 7. 黄褐色粘質土 8. 灰黄褐色粘質土
 9. 灰黄褐色粘質土 10. 灰黄褐色粘質土 11. 暗褐色粘質土 12. 灰黄褐色粘質土 13. 赤褐色砂質土 14. 暗褐色粘質土
 15. 灰褐色砂質土 16. 暗黄灰色砂質土(灰色粘土ブロック混) 17. 黒灰色粘質土(砂混) 18. 暗青灰色粘質土

第47図 VI区SD6土層堆積状況実測図(1:80)

VI区SD6 (第16・47図)

北西から南東へ直線的に延びる溝址であるが、北西端では若干東側へ屈曲する様子がうかがわれる。古墳時代のSD7号溝址を切って構築されており、約15m程を検出している。確認面での上幅は平均5.60m、底幅平均2.90m、深さ平均94cmを測る。

VI区SD1と同一の溝址である可能性が想定でき、SD1とともに二重に方形に区画された区域の、内側の区画となる可能性が考えられる。

ロココワラケ (第58図394~403)、在地産須恵質すり鉢 (413)、瓦質内耳鍋 (418~420)、酸化炭焼成土器香炉 (417)、龍泉窯系画花文青磁碗 (404)、古瀬戸節皿 (407・409)、古瀬戸尊式花瓶 (410)、常滑三筋壺 (411)、珠洲すり鉢 (412・414)、珠洲壺 (415・416) 等が出土しており、14世紀後半~15世紀前半代の所産と考えられる。



VI区SD6



VI区SD6土層堆積状況

VI区SD11 (第16・48図)

南西から北東方向に、直線的に延びる溝址で、古墳時代前期のSD10号溝址を切って構築されるが、5m程を検出したのみで詳細は不明な部分が多い。

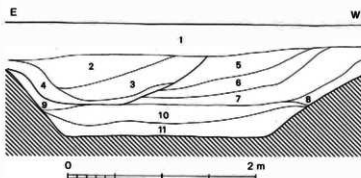
確認面での上幅は平均2.90m、底幅平均1.50m、深さ平均80cmを測る。

VI区SD5と関連するものであると想定される溝址で、SD5とともに二重に方形に区画された区域の外側の区画を構成するものである可能性が考えられる。



VI区SD11

ロココワラケ (第59図421~423)、在地産須恵質すり鉢 (433)、瓦質内耳鍋 (436)、龍泉窯系画花文青磁碗 (424)、同蓮弁文青磁碗 (425)、白磁小皿 (427)、古瀬戸仏華瓶 (429)、珠洲すり鉢 (430~432)、珠洲壺 (434~437) を出土しており、14世紀後半~15世紀前半代の所産と考えられる。



1. 耕作土(水田耕土)
2. 暗褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 灰褐色砂質土
5. 暗褐色粘質土(砂混)
6. 暗褐色粘質土
7. 黄灰色粘質土
8. 黄灰色砂質粘土
9. 黄灰色砂質粘土
10. 暗青灰色粘土(黒色粘土ブロック混)
11. 暗青灰色粘質土

第48図 VI区SD11土層堆積状況実測図(1:40)

第5章 尾張城跡出土焼物と遺跡の性格について

(財)長野県埋蔵文化財センター調査研究員 市川 隆之

焼物

1 地点別出土状況

整理では中世の焼物1348点と近世焼物若干を抽出した。中世焼物はI区196点、II区356点、III区1点、IV区2点、V区302点、VI区439点、VII区52点出土し、極端に少ないIII・IV区とやや少ないVII区は検出面採取品しかない。遺構別ではピット138点、土壇159点、竪穴建物跡10点、溝跡485点、検出面他556点と溝跡・検出面採取品が全中世焼物の6割を占める。もちろん、各地区の遺構別出土量は一律ではなく、II区ではピット・土壇出土の方が多いが、V・VI区は溝跡出土が多い。以下には掲載図を中心に出土焼物の説明を加える。なお、焼物種区分や名称、時期比定の参考文献は焼物種別概観のところで触れた。また、文中の数字は図の掲載番号であり、点数は接合しない破片数を示す。

(1) I 区

中世焼物は196点と遺構出土の近世焼物3点を抽出した。他の調査区よりもピット・土壇出土が多く、溝跡・検出面出土が少ない。中世焼物の内訳は地産土器170点（カワラケ131点、須恵質すり鉢9点、瓦質すり鉢2点、同内耳鍋1点、同火鉢1点、酸化炭焼成内耳鍋26点）、精製瓦質すり鉢1点、輸入陶磁器5点（画花文青磁碗1点、無文青磁碗2点、白磁皿2点）、古瀬戸4点（瓶子1点、卸皿1点、小皿1点、鉢1点）、珠洲12点（すり鉢1点、壺2点、甕9点）、越前甕1点、信楽壺2点、灰軸系陶器こね鉢1点がある。これ以外に溝跡より出土した近世焼物3点がある。全般的に見て15世紀後半頃の所産が多い。

ピット出土は62点あり、13点図示した。図示以外はカワラケ小片がほとんどだが、P56より在地産須恵質すり鉢片、P28より瓦質内耳鍋小破片、P7・10・14・23・25・35・58で酸化炭焼成内耳鍋小破片が出土している。2・5・7・8・10・13がロクロカワラケ（10煤付着）で、6は酸化炭焼成内耳鍋、1は古瀬戸後期様式IV期腰折皿、9は白磁皿である。P2・7・10・14・23・25・35・58は15世紀の所産とみられる。土壇出土は79点あり、28点を図示した。14・16・18・21・23・25・30・35・36・40・41はロクロカワラケ（16・21・26・28・30煤付着）、33が酸化炭焼成内耳鍋、17・20・31・38が在地産須恵質すり鉢である。33は焼成不良で瓦質にも見える。34が古瀬戸卸皿、24が珠洲IV期甕、37・39が珠洲甕である。SK1・6・7は図示しなかったものを加えても内容は大きく異なるが、SK8・9は酸化炭焼成内耳鍋破片が図示以外にもある。SK8・9は15世紀、SK1・6・7・10は子細不明ながら14世紀後半頃と見られるか。なお、竪穴建物SB1からカワラケや在地産須恵質すり鉢片など10点が出土しているが、小片のため図示し得なかった。

溝跡出土は21点あり、中世の所産15点と、近世の所産3点を図示した。47・52～54がロクロカワラケ（53煤付着）、48・51が在地産須恵質すり鉢、46が瓦質すり鉢、44が精製胎土の瓦質すり鉢？、58が酸化炭焼成内耳鍋である。51はやや焼成が軟質で瓦質との識別が難しい。44は外面に連続半円の櫛目文、内面に縦方向の条線が施される。内面条線を卸目と考えてすり鉢としたが、類例がなく器種・時期認定に不安がある。45は15世紀前後の白磁皿、50古瀬戸前期様式瓶子、55は古瀬戸後期様式IV期鉢、49は珠洲すり鉢、56～59が珠洲甕、42は伊万里VI期後半（18世紀後半）の陶胎碗、43は近世の近在産鉄軸甕である。SD1は18世紀後半以後、SD5は14世紀後半以後、堀は15世紀後半であろう。SD3・4は焼物が少なく時期判断が難しい。

検出面他は24点あり、8点のみ図示した。60～64がロクロカワラケ、66が酸化炭焼成内耳鍋、57が珠洲甕、65が13世紀後半～14世紀前半の東濃産灰軸系陶器こね鉢である。

(2) II 区

中世356点と遺構出土の近世焼物1点を抽出した。検出面採取品が最も多く7割を占める。中世焼物は在地産土器296点(カワラケ229点、須恵質すり鉢11点、瓦質すり鉢1点、同内耳鍋2点、酸化炭焼成内耳鍋51点)、精製瓦質土器2点(香炉1点、火鉢1点)、輸入陶磁器17点(龍泉窯系画花文青磁碗3点、同蓮弁文青磁碗6点、同蓮弁小鉢1点、青磁蓋1点、外反玉縁口縁の青磁碗2点、白磁小皿1点、青白磁梅瓶1点、不明青磁2点)、古瀬戸15点(天目茶碗3点、平碗1点、折縁深皿1点、瓶子・瓶類5点、縁軸小皿1点、御皿1点、香炉1点、仏華瓶2点)、常滑壺1点、珠洲22点(すり鉢12点、壺7点、甕3点)、信楽?壺1点、山茶碗2点である。本調査区では12世紀後半～15世紀(16世紀?)までの所産が認められるが、13～14世紀代、15世紀代後半頃(～16世紀)の2時期が比較的目立つ。

ピット出土は17点あり、5点図示した。68が手づくねカワラケ、70・72がロクロカワラケ、69が古瀬戸前期様式の瓶子、71が珠洲すり鉢である。出土量が少ない上に小破片がほとんどで遺構の時期判断は難しいが、本遺跡ではP1・5のように13世紀の焼物が出土した柱穴は少ない。土壌出土は54点あり、24点図示した。73～75・77・78・85～91・95・96がロクロカワラケ(87煤付着、75精胎)、79が在地産須恵質すり鉢、82・94が酸化炭焼成内耳鍋、76が龍泉窯系蓮弁文青磁碗、93が同画花文青磁碗、80が珠洲Ⅲ・Ⅳ期のすり鉢、84が珠洲Ⅳ期の壺、92が東濃産の山茶碗、83はフィゴ羽口である。SK9は15世紀以後、SK5は14世紀以後と思われる、SK8は概略14世紀前後のものだが、82のみ後出年代で時期判断が難しい。他は子細不明である。

溝跡出土は30点あり、中世23点と近世1点を掲載した。97・98・104・108・109・114～118がロクロカワラケ(114煤付着)、110・112・119が在地産須恵質すり鉢、100～103・107が酸化炭焼成内耳鍋、99が珠洲壺、106が珠洲Ⅲ～Ⅳ期前半のすり鉢、113が珠洲Ⅱ～Ⅲ期の壺、111が古瀬戸後期様式Ⅱ期頃と思われる御皿、105は近世の近在産と思われる土瓶破片である。SD1・4は15世紀以後と見られ、105が混入でなければSD3は近世以後と思われる。SD5・10は14世紀の可能性がある。

検出面出土は120～144がロクロカワラケ(129・134煤付着)、169～173が在地産須恵質すり鉢、174は瓦質すり鉢、176・177・179～181が酸化炭焼成内耳鍋、175・178が瓦質風炉である。内耳鍋179の底面は丸底か、歪みか判然としないが、180は明らかに丸底である。147～149が龍泉窯系画花文青磁碗、150が見込みに魚文を配する龍泉窯系蓮弁文小鉢である。147・149は13世紀、148・150は13世紀後半～14世紀前半の所産である。145・146は外反口縁の青磁碗、151は時期不明の龍泉窯系画花文青磁碗、152は青磁蓋、153は15世紀の白磁皿で、157は青白磁梅瓶である。154は13世紀後半～14世紀前半の東濃産山茶碗、155は古瀬戸後期様式Ⅳ期の天目茶碗、156は同後期様式縁軸小皿、158は同じく尊式花瓶、159も同香炉、160は中期様式の仏華瓶、161も中期様式折縁深皿である。162～165・168が珠洲すり鉢で162・165はⅡ期、163・164はⅢ期、168はⅡ期前後と思われる。166は珠洲Ⅱ・Ⅲ期の壺、167は珠洲壺である。

(3) III 区

検出面出土の182の龍泉窯系画花文青磁碗が1点のみある。

(4) IV 区

検出面で183の青磁香炉と184の珠洲すり鉢の2点が採取されたのみである。184は内面が摩耗している。

(5) V 区

中世302点、近世はSD1と検出面出土の17点を抽出した。中世焼物は溝跡出土が最も多く、検出面出土が続き、ピット・土壌出土は少ない。中世焼物は在地産土器238点（カワラケ177点、須恵質すり鉢2点、瓦質すり鉢2点、同内耳鍋3点、同火鉢2点、酸化炭焼成内耳鍋52点）、精製瓦質土器3点（香炉？1点、火鉢2点）、輸入陶磁器24点（平安末白磁碗1点、同安楽系青磁碗1点、龍泉面花文青磁碗2点、同蓮弁文青磁碗4点、青白磁梅瓶1点、外反口縁の青磁碗2点、雷文帯青磁碗1点、細線蓮弁文青磁碗2点、腰の張る青磁碗2点、不明青磁碗4点、白磁皿1点、子細不明白磁皿1点、青花皿2点）、古瀬戸14点（天目茶碗4点、平碗4点、鉢1点、瓶子1点、小皿3点、茶壺1点）、常滑壺1点、珠洲18点（すり鉢3点、壺6点、甕3点、壺蓋識別不能6点）、越前甕2点、信楽？壺2点である。平安末期から15世紀後半（16世紀代前半）までの所産が含まれ、近世の所産も出土量が比較的多い。ただ、近世陶磁器は溝跡出土が多く、窪地として残存した所へ混入したと思われる。全般的な傾向としては14世紀後半～15世紀後半のものが多いように感じられる。

ピット出土は37点あり、13点図示した。185～187・190・192～196がロクロカワラケ（187煤付着、190精胎）、188は在地産須恵質すり鉢、189は珠洲壺、191は細線蓮弁文青磁碗、197は口縁部外面に沈線を施す青磁碗である。P26・51は15世紀以後とみられ、他は子細不明ながら14世紀以後の所産ではある。また、図示し得なかったが、P54より酸化炭焼成内耳鍋、P50より精製胎土カワラケが出土しており、ピットの多くは15世紀代以後と推定される。土壌出土は21点あり、10点図示した。195・196・200・201カワラケ、199は瓦質土器香炉の足、202が酸化炭焼成内耳鍋、198は15世紀前半の腰の張る青磁碗、203・204は13世紀の龍泉窯系蓮弁文青磁碗、205は外面に印刻花文を施す古瀬戸中期様式瓶子である。なお、SK3は図示以外に近世瓦1点とカワラケ小片が出土している。SK1・2・5は15世紀の所産とみられ、SK3は近世瓦以外は、ほぼ14世紀前半の所産である。

溝跡は131点あり、本地区出土の約43.4%を占める。ほとんどがSD1出土で、SD4から2点、SD6から1点出土したのみである。206～229はロクロカワラケ（206・208・213・227煤付着）、238・239が在地産須恵質すり鉢で、239は焼成不良である。240は瓦質すり鉢、250・251は在地産？瓦質風炉、252～258は酸化炭焼成内耳鍋である。口縁部形態は252・253・255～257のように外反するものが多く、わずかに258のような直立気味に立ち上がって内面に調整痕を残さないもの、254のように直立気味で屈曲部近くの内面を強くナゲるものがある。底部は平底の他に258の丸底がある。230は雷文帯をもつ青磁碗、231は細線蓮弁文青磁碗、232は白磁皿と思われるが子細不明である。233は青花皿、234は古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ期天目茶碗、235は古瀬戸天目茶碗、236は古瀬戸後期様式Ⅳ期天目茶碗、237は古瀬戸後期様式鉢、243・244は珠洲Ⅳ期甕、245～248は珠洲壺、249は14世紀後半頃の越前甕、259は12世紀後半の同安楽系青磁碗、241は近世の伊万里Ⅲ期の碗、242も近世の京焼系碗、260は伊万里瓶類である。年代はSD4が小破片しかなく子細不明、SD1は15世紀頃の所産が多いながら近世までの所産が含まれ、継続利用されていると思われる。SD6は近世とみられる。

検出面出土は113点あり、中世39点、近世1点を図示した。261～278がロクロカワラケ（270・275・276煤付着、278精胎）、294・295が瓦質内耳鍋である。293は精製胎土の瓦質香炉？とも思われるが、筒形小壺状のもので近世の火消し壺類かもしれない。296～300が酸化炭焼成内耳鍋である。297はあきらかに丸底となる。279は外反口縁の青磁碗、280が15世紀後半～16世紀初頭頃の青花皿、285は伊万里の可能性がある。281は青白磁梅瓶、282は龍泉窯系蓮弁文青磁碗を転用した円盤である。283は古瀬戸後期様式Ⅳ期の小皿、284は同じく天目茶碗、286は17世紀初頭の越前瀬戸向付、287は信楽編年のⅡ・Ⅲ期に該当しようか。290は常滑6b期の壺、288・289は波状文をもつ珠洲壺である。291は珠洲Ⅳ・Ⅴ期と思われるすり鉢、292は珠洲壺である。ほぼ遺構出土焼物と類似した年代の所産で占められ、一部12世紀の所産や16・17世紀の所産もあるが、14世紀前後のものが多い。

(6) VI 区

中世焼物が439点ある。溝跡出土が約69.0%を占め、続いて検出面出土が24.8%あり、ピットや土壌出土は僅かである。中世焼物は在産土器335点（カワラケ257点、須恵質すり鉢6点、瓦質すり鉢1点、同内耳鍋15点、同火鉢1点、酸化炭焼成内耳鍋52点、同すり鉢1点、酸化炭焼成土器香炉2点）、精製瓦質火鉢1点、輸入陶磁器31点（平安末白磁碗4点、龍泉窯系面花文青磁碗5点、同蓮弁文青磁碗6点、外反口縁青磁碗3点、不明青磁碗5点、白磁皿2点、多角杯1点、青磁鉢1点、青白磁合子2点、青花皿2点）、古瀬戸20点（天目茶碗4点、平碗1点、鉢1点、瓶頸1点、縁軸小皿2点、卸皿2点、小皿類4点、仏華瓶2点、茶壺1点、底卸目皿1点、陶台1点）、常滑三筋壺1点、珠洲43点（すり鉢18点、壺14点、甕4点、壺埴識別不能7点）、越前甕6点、山茶碗1点、産地不明瓷器茶壺1点である。本地区もV区同様に年代幅をもつ陶磁器が出土しているが、多くは溝跡出土である。溝跡自体は14世紀後半～15世紀前半頃の陶磁器が多いため、それ以前のは混入の疑いがある。一方、より後出す酸化炭焼成内耳鍋は検出面を中心に出土している。

ピット出土は22点あり、10点を図示した。302・303・307・309がロクロカワラケ（303精胎）、304・310が酸化炭焼成内耳鍋、308が15世紀末～16世紀前半の青花皿、305が古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ期の平碗、306は古瀬戸卸皿、301は珠洲Ⅳ・Ⅴ期のすり鉢である。これ以外にP7・44・53より酸化炭焼成内耳鍋片が出土しており、P7・14・20・44・48・52・53は15世紀以後とみられる。他は小破片のみで子細不明である。土壌出土は5点あり、SK2出土の3点のみ図示した。311・312がロクロカワラケ、313が珠洲壺と思われる。

溝跡は総数303点があり、出土量が多いため個別に記述する。SD1出土は316～325がロクロカワラケ（319底部穿孔、318体部穿孔途中）、315が酸化炭焼成内耳鍋、314が珠洲壺、326は瓦質風炉である。SD2は327～329・331がロクロカワラケ、333が酸化炭焼成内耳鍋で、内耳は、灰褐色きみの色調で瓦質との判断が難しい。図示以外では古瀬戸後期様式茶壺、酸化炭焼成内耳鍋片もあり、本跡は15世紀の所産と思われる。SD2は330が青白磁の合子蓋、332が外反口縁の青磁碗であり、他に酸化炭焼成内耳鍋片1点やカワラケ小破片がある。SD3は碗のみがある。SD5は334～373がロクロカワラケ（336・339・353・358・371・373・煤付着、343体部穿孔、342底部穿孔途中）、390・391が瓦質内耳鍋、392が酸化炭焼成内耳鍋である。酸化炭焼成内耳は図示以外に上層から9点出土しているが、いずれも小破片である。瓦質内耳鍋390は全体形状が窺える資料である。393は酸化炭焼成土器香炉である。374は龍泉窯系面花文青磁碗、375は同蓮弁文青磁碗、376は高台のみながら龍泉窯系青磁碗と思われる。377は外反口縁の青磁碗、378は輪花の青磁鉢？、379は龍泉窯系青磁碗、380は白磁小皿、381は白磁多角杯、382は古瀬戸後期様式Ⅱ期と思われる天目茶碗、383は同後期様式Ⅰ期と思われる天目茶碗、384は同後期様式Ⅲ期と思われる天目茶碗、385は古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅳ期の燗台である。386は古瀬戸後期様式の卸をもつ灰軸の縁軸小皿である。387～389は珠洲すり鉢であり、387・388は内面が摩耗する。389は珠洲Ⅲ期であろう。SD6出土は394～403がロクロカワラケ（397・402煤付着）、413が在産須恵質すり鉢、418～420が瓦質内耳鍋である。418は口縁部直下に穿孔が認められ、419・420は底部付近の破片で420は外面がヘラ削りされる。いずれも底部はゆるやかな丸みを帯びると推測される。なお、酸化炭焼成内耳鍋は図示していないが小破片4点が出土している。417は在産の酸化炭焼成土器香炉の足である。404は龍泉窯系面花文青磁碗、405は古瀬戸前期様式Ⅲ・Ⅳ期の底卸目皿、407～409は同後期様式小皿で、407は灰軸の縁軸小皿、408は内面に鉄軸、409は灰軸がかかる。410は同後期様式等式花瓶、413は常滑三筋壺、406は東濃産山茶碗である。412は珠洲Ⅱ・Ⅲ期前後のすり鉢、414はⅢ期の珠洲すり鉢、415・416は珠洲壺である。SD10は珠洲矢羽印きの壺片が出土しているが、小片で図示していない。SD11は421～423がロクロカワラケ（423煤付着）、433が在産須恵質すり鉢、436が瓦質内耳鍋、424が龍泉窯系面花文青磁碗、425が同蓮弁文青磁碗、426は白磁V類で平安時代末期の所産、427は白磁小皿、428は古瀬戸

後期様式の平碗底部、429は古瀬戸中期様式仏華瓶である。430・431は珠洲Ⅱ期項、432は珠洲Ⅴ期のすり鉢、434～437は珠洲壺で、434は底部のみの破片、435は珠洲Ⅲ期、437はⅡ・Ⅲ期の所産と推定される。S D12出土は442が瓦質内耳鍋、439が珠洲Ⅳ・Ⅴ期すり鉢、438が珠洲Ⅳ期壺、440が珠洲壺、441が越前壺である。以上のように溝跡出土陶磁器は14世紀後半～15世紀前半頃のものが多く、酸化炎焼成内耳鍋小破片は少量ながら、瓦質内耳鍋の大型破片が多い特色がある。瓦質すり鉢出土の少なさは気になるが、酸化炎焼成内耳鍋を混入すると瓦質内耳鍋の年代を推測する資料になり得る可能性がある。

検出面出土は109点あり、51点図示した。443～463がロクロカワラケ（458精胎）、482が瓦質すり鉢、486・487は瓦質内耳鍋、484は酸化炎焼成土器すり鉢、488～493は酸化炎焼成内耳鍋、485は瓦質火鉢である。464・465は熊泉窯系画花文青磁碗、466は細線蓮弁文青磁碗、467は青花皿、468は古瀬戸後期様式縁軸小皿、469は古瀬戸後期様式Ⅳ期の小皿、470は灰軸が内底面までかかる小皿、471は古瀬戸後期様式香炉、472は後期様式茶壺、473は鉄軸が施される古瀬戸瓶類底部、474は古瀬戸後期様式鉢、475～478は珠洲すり鉢で475はⅠ期、476はⅡ期、477はⅢ期、478はⅣ期と思われる。479はⅣ・Ⅴ期の珠洲壺、480・481はⅡ・Ⅲ期と思われる。483は産地不明の瓷器系の壺である。外面縦、内面横・斜刷毛調整される。暗灰色の比較的精良な胎土で焼成は良好である。検出面出土品は遺構出土焼物とはほぼ同じ年代の所産であるが、酸化炎焼成内耳鍋が比較的多くまわって出土している。

[7] VII 区

検出面採取のみがある。中世1点を抽出し、中世焼物は在地産土器44点（カワラケ22点、須恵質すり鉢1点、酸化炎焼成内耳鍋21点）、輸入陶磁器2点（熊泉窯系画花文青磁碗1点、不明青磁碗1点）、古瀬戸香炉1点、珠洲5点（すり鉢1点、壺4点）である。494・495は珠洲壺で、496は外面が縦ナデされる壺である。暗青灰色を呈する還元炎焼成土器だが珠洲製品とも断定はできない。

2 尾張城出土焼物の傾向

(1) 焼物種別の傾向

① 在地産土器

合計1,083点得られ、中世焼物の約80.3%を占める。在地産土器には明褐色を呈する酸化炎焼成土器と青灰・黒灰色等を呈する還元炎焼成土器がある。前者は比較的精良な胎土でロクロ使用が多い小製品とロクロ未使用で砂を多く含む大型品に分けられ、後者もやや硬質の青灰色須恵質土器と黒灰色瓦質土器に区別される。これらのなかで須恵質土器・瓦質土器・酸化炎焼成土器は成形方法が類似するが、須恵質土器はすり鉢のみ、瓦質土器はすり鉢・内耳鍋・火鉢、酸化炎焼成大型品は僅かなすり鉢・大量の内耳鍋というように、若干器種に差異がある。この器種の関係や、各すり鉢の模倣原形となる珠洲すり鉢の形態的比較から須恵質土器一瓦質土器一酸化炎焼成大型品という変化が想定できる。一方、酸化炎焼成小型品は上記の焼物種と共存しながら一貫して存在することから、類似焼成ながら酸化炎焼成大型品とは区別すべきにとらえた。

A 須恵質土器

この焼物は輪柄俊雄氏によって初めて指摘されたものである。すり鉢のみ28点あり、中世焼物の約2.1%、在地産土器の約2.6%を占める。ちなみに石製品以外の焼物すり鉢では珠洲36点に続く出土量となり、すり鉢の約38.3%を占める。内面の節目、口縁部形態、還元炎焼成など珠洲製品との類似点も多い。成形方法はロクロ未使用で外底砂底、体部は口縁部周囲のみ回転ナデ？を施し、下半は縦方向の刷毛ナデの後、雑なナデ調整を施す。県内では小布施町周辺を北限として南は塩尻・茅野市まで出土が知られる。千曲川沿いに出土例が多く、なかでも長

野市南部から更埴市にかけての量が多い。この地域に生産地があるとみられる。口縁部の形態は口唇部内面側が突出する三角形(31・38・48等)と方形(17・20・112・169・170等)があり、僅かに瓦質土器との識別が難しいもの、端面を水平に取るもの(49・51等)がある。三角形口縁のものに焼成不良のものが多く、方形口縁のものはほぼ青灰色で占められ、水平口縁のものも焼成良好が多い。各口縁部形態はそれぞれ珠洲Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期のすり鉢に類別があり、珠洲編年の年代を当てはめれば13世紀前半～14世紀となるが、調査では伴出陶磁器等から年代を追証できるものはない。また駒柄氏は方形口縁部のすり鉢を14世紀代と推定し、近県の類似した土器(北関東の瓦質土器)も13世紀前半まで遡るとは想定されておらず、珠洲すり鉢に直接対比し得るかは今後の検討によらざるを得ない。

参考文献

駒柄俊夫 1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』第38巻第4号

B 瓦質土器

黒灰色・灰色の軟質土器ですり鉢7点、内耳鍋21点、火鉢6点の合計34点を抽出できた。中世焼物全体の約2.5%、在地産土器の約3.1%を占める。すり鉢は水平に端面を取る口縁形態があり(482)、内耳鍋は口縁部が短く内湾ぎみに立ち上がって底部は若干浅い丸みを帯びる(176・294・295・390・442・486等)。すり鉢は珠洲Ⅳ期の模倣と見られ、その形態は酸化炎焼成内耳鍋とやや異なる。火鉢(175・250・251)は粗砂を含む焼成不良のものを本焼物ととらえたが、識別に不安が残る。これらの瓦質土器の成形方法は基本的に須恵質すり鉢と同じである。この成形方法の類似点や識別の難しい個体が存在すること、器種の類似から須恵質すり鉢との関連が想定されるが、出土量の少なからず存続時期は短いと思われる。ただし、珠洲製品の模倣形態差からして須恵質すり鉢に後出すると思われる、酸化炎焼成内耳鍋は小破片ながら瓦質内耳鍋に大型破片が多いⅥ区S Dから年代を類推すると、ほぼ14世紀後半～15世紀前半の間の所産と思われる。現時点の出土分布は長野市周辺から更埴市にかけて認められており、須恵質すり鉢よりも流通範囲が狭いとみられる。

一方、これらの瓦質土器とは別に精製された胎土で、スタンプ文を多用する瓦質土器が香炉2点(199・293)、火鉢4点(178・326)、すり鉢?1点(44)の7点ある。磨き調整を用い、スタンプ装飾をもつなどの調整方法の差異がある。子細は今後の検討によりたいが、基本的に搬入品と思われる。

C 酸化炎焼成大型品

明褐色を呈する土器ですり鉢と内耳鍋の合計203点出土した。中世焼物の約15.0%、在地産土器の約18.7%に相当する。すり鉢(484)は1点のみで全体形状がわかるものはない。内耳鍋は202点出土した。口縁部はやや長めで外反するもの(181・252・253・255・256・293・296・299・488・489・490・491等)、直立ぎみで内面に調整痕を残さないもの(258・300)、直立ぎみながら屈曲際内面が強くナデられて薄くなるもの(254)がある。底部は平底(54・94・107・254・298・300等)と丸底があり、丸底は浅く突出するように丸くなるもの(179)と半円形に丸くなるもの(258・297・492・493)がある。成形方法は瓦質土器、須恵質土器と同じであるが、内耳鍋の形態は瓦質内耳鍋と異なる。現時点では酸化炎焼成内耳鍋は中世後半を代表する焼物であることが知られており、16世紀の陶磁器を出土する遺跡では瓦質内耳鍋の出土が認められていないことから瓦質内耳鍋に後出することは間違いないだろう。今回の調査で具体的な年代を知る出土例に恵まれていないが、上記の瓦質土器の年代から類推すると少なくとも15世紀前半以後の所産となる。

D 酸化炭焼成小型品

明褐色、灰褐色を呈する比較的精良胎土の土器で、カワラケ816点、香炉2点の合計818点がある。中世焼物の約60.6%、在産土器の約75.3%が該当する。カワラケは圧倒的な出土量を誇り、本遺跡を特徴づける焼物とみられる。成形にロクロを用いるものが多いが、僅かに手づくねがある(68)。後者は13世紀前後の京都系カワラケの模倣形態で、ロクロ調整のものは在地の普遍的な存在とみられる。カワラケは明褐色・灰褐色系の風化酸化鉄粒を含む胎土と灰白色の精良胎土のものに大別され、灰白色精良胎土カワラケは出土量が少なく(75・190・301)、口径15～16cm前後の大型品が多い傾向から特殊なものとみられる。一方、前者は出土量も多く、本遺跡では普遍的な存在で形態や調整方法に多様なものがある。概略ではa、立ち上がり不明瞭で斜めに体部が立ち上がる厚手のもの(15・356・372・379・399・401等)、b、底径が小さく体部が斜めに立ち上がるもの(36・87・338・356・126・209・443等)、c、体部の内面はゆるやかに立ち上がるが外面は急速に短く立ち上がるもの(5・52・96・264・276等)、d、比較的均一につくりで体部の立ち上がり屈曲が明瞭なもの(117・224・354・355等)があるようだ。この中でaは内底面にヨコナデを残し、cは内底面の立ち上がり際に顕著なロクロナデに伴う窪みがつくものが多い。また、d類の小型品は不明で本類自体の分類に問題を残し、他類と識別に迷うものもある。これ以外に分類し得ると思われるものがあるが、破片資料であったり、出土量も僅かで今回は分類しなかった。出土量ではb・c・dが多くaが少量となる。

年代は分類の妥当性が検討できていないため細不明ながら、aは厚手のつくりから比較的識別しやすい存在で、長野市栗田城や同石川条里遺跡などの居館跡に類例が多い。これらの遺跡では15世紀前半頃を中心とすると推定されるが、本遺跡の当該期の陶磁器を多く出土したVI区SDではd・b類の方が多く、客体的な存在である。年代比定に問題があるか、あるいはVI区SDが若干先行すると考えられる。

香炉(393・417)は出土がわずかであるが、形態は古瀬戸筒形香炉を模倣したと思われる。成形方法はロクロカワラケと同じである。

② 輸入陶磁器

総数81点あり、中世焼物全体の約6.0%にあたる。内訳は白磁碗5点、青磁碗56点、青磁鉢1点、青磁鉢1点、青磁蓋1点、青磁香炉1点、白磁皿7点、青白磁梅瓶2点、同合子2点、青花皿4点、他は伊万里との識別に不安を残す小片である。時期別に見ると中世前半では11世紀後半～12世紀前半に白磁碗V類(426)があり、IV・V・VIII類等と識別不能の体部破片を合わせると5点ある。12世紀後半では同安溪系青磁碗が1点(259)、龍泉窯系画花文青磁碗は13点(93・182・203・374・404・424・464・465)である。13世紀～14世紀前半の龍泉窯系蓮弁文青磁碗は16点(76・147・148・149・204・282・375・424-内、13世紀後半～14世紀前半は148の1点)、同小鉢が1点(150)、12世紀後半～13世紀と思われる青白磁合子2点(330)、13世紀と思われる青白磁梅瓶2点(157・281)がある。12～14世紀前半の所産は輸入陶磁器の約54.3%が該当し、蓮弁文青磁碗が突出した量で画花文青磁が続く。器種は碗が多く、皿は見られない。ただし、12世紀後半の所産が多い点を除くと当地域に一般的な様相である。

14世紀末(後半)～15世紀初頭のものでは外反口縁あるいは玉縁青磁碗7点(145・146・279・332・377)、同時期と思われる輪花鉢1点(378)、白磁多角杯1点(381)、同15世紀前半の雷文青磁碗1点(230)、子細不明ながら類似時期と思われる青磁碗1点(379)、15世紀代の腰の張る碗2点(197・198)、15世紀後半～16世紀前半の細線蓮弁文青磁碗は4点(191・231・466)、同時期の青花皿4点(233・280・308・467)、白磁皿1点(232)がある。15世紀前後と思われる小皿は6点(9・45・153・380)ある。中世後半期の所産では碗以外の器種も一定量

認められ、特に血類の存在は中世前半代と大きく異なる様相となる。ちなみに中世後半期と特定されたものは輸入陶磁器の34.6%にあたり、数量的には中世前半よりやや少ない。

参考文献

- 横田賢次郎・森田勉1978 「太宰府出土の輸入国陶磁器について」『九州歴史資料館研究紀要4』九州歴史資料館
上田秀夫1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№2
小野正敏1982 「14～16世紀の染付碗、皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2
森田 勉1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2

③ 古瀬戸

古瀬戸は54点あり、中世焼物の約4.0%に該当する。13世紀～同末の前期様式は瓶子4点(50・69)・底即目皿(13世紀後半)1点(405)の5点、13世紀末～14世紀中葉の中期様式は瓶子1点(205)・仏華瓶2点(160・429)・折縁深皿1点(161)の4点があり、14世紀後半～15世紀末までの後期様式は天目茶碗11点(155・234～236・284・382・383・384)、平碗6点(305・428)、鉢3点(55・237・474)、茶壺2点(472)、瓶類3点(173)、縁軸小皿3点(156・407・468)、小皿類8点(1・283・408・409・469・470)、即目皿4点(34・111・306・386)、香炉2点(159・471)、燭台1点(385)、尊式花瓶2点(158・410)の46点である。後期様式内ではⅠ期(1360～1380)・Ⅱ期(1380～1420)と思われるものは天目茶碗(234・382・383)・平碗(305)、Ⅲ期(1420～1440)は天目茶碗(384)、Ⅳ期(1440～1485)は天目茶碗(236・284)、小皿(1・283・469)、鉢(55)である。後期様式Ⅳ期のものがやや多い傾向がある。これは本遺跡の存続時期に係るものだろう。以上の型式比定には不安があるが、概略の傾向として14世紀後半以後に古瀬戸の増加が認められ、13～14世紀代は瓶子や仏華瓶、14世紀後半から15世紀にかけて一定量の仏具類に加えて食器類が増加し、一方で瓶類の減少が認められる。後期様式における古瀬戸食器の増加は輸入陶磁器の若干の減少と対応しているように見える。また、中世後半期の輸入陶磁器同様に皿の増加傾向をもつが、古瀬戸は独自の役割を担っていた面もあるようだ。

参考文献

- 藤沢良祐 1991 「瀬戸古窯跡群Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』
藤沢良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』8 東洋陶磁学会
藤沢良祐 1995 「瀬戸古窯跡群Ⅲー古瀬戸前期様式の編年ー」『財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』
第3輯 瀬戸市埋蔵文化財センター

④ 珠洲

珠洲は101点(7.5%)あり、内訳はすり鉢36点、壺33点、甕19点、小破片で壺・甕の識別できなかったものが13点である。すり鉢は時期比定に不安を残すが、内湾ぎみの体部で即目をもたないⅠ期(12世紀後半)と思われるものは1点(475)、口唇部内端が突出するⅡ期(13世紀前半)6点(162・165?・168?・430・431・476)、Ⅲ期(13世紀中葉～後半)4点(163・164・414・477)、Ⅳ期(13世紀末～14世紀後半)と思われるもの1点(478)、Ⅴ期(14世紀末～15世紀前半)1点(432)である。体・底部破片はⅡ～Ⅲ期(412)、Ⅲ～Ⅳ期前半(81・106)、Ⅳ期後半～Ⅴ期(291・301・439)と思われる。この比定からするとⅡ期に多くの搬入があり、以後は時期が下るにしたがって搬入量が減少し、15世紀前半のⅤ期には激減して搬入されなくなる傾向が窺える。一方、先述したように珠洲の模倣品とみられる在地産須恵質すり鉢は形態的類似から対比すると珠洲Ⅱ期～Ⅳ期に存在してⅢ期前後が盛期となり、生産は珠洲すり鉢の搬入状況とほぼ比例していたことになる。最も、在地産須恵質土器のと

ころでふれたように在産須恵質すり鉢の年代推定に問題があり、今後の検討が必要である。なお、出土すり鉢全体のなかで珠洲は49.3%、在産須恵質すり鉢28点(38.3%)、瓦質すり鉢7点(9.6%)、酸化炭焼成すり鉢1点(1.4%)、東海産灰軸系陶器こね鉢1点(1.4%)となる。

壺はロクロ調整(288・289・314)5点で、残り26点が叩き壺である。叩き壺の年代はⅢ期と思われるもの(435)、Ⅳ期と思われるもの(84・438)がある。体部破片では比較的細かい叩き目をもつ(113・166・437)はⅡ・Ⅲ期の所産だろうか。すり鉢より若干遅れて搬入盛期を迎えるようだ。壺は確認できたところでⅣ期の所産(243・244)、Ⅳも後半と思われるもの(479)がある。壺・すり鉢とはやや搬入状況が異なり、壺は古い所産と、Ⅴ期のものはあまり認められない。

参考文献

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』

⑤ 瓷器系陶器

無釉の焼締陶器で、壺・甕・すり鉢などがあるが、本遺跡では珠洲や在産土器群が主となる中で客体として存在する。出土量が僅かなため一括して扱う。

常滑は三筋壺1点(411)、壺(290)1点、体部の破片で子細不明破片1点の合計3点(0.2%)がある。三筋壺は12世紀後半～13世紀、壺は中野氏の編年の6b期(13世紀末)とみられる。灰軸系陶器(山茶碗系)は全部で4点(0.3%)あるが、いずれも灰白色の緻密な胎土の東濃産で13世紀後半～14世紀前半の所産とみられる。いわゆる山茶碗(92・154・406)は3点、こね鉢は1点(65)ある。信楽は中津川との識別が難しいものもあるが、壺の破片と思われるもの5点(0.4%)がある。口縁部破片(287)より信楽編年のⅡ期かⅢ期(14世紀)と思われる。越前(19・249・441)は9点(0.7%)甕のみがある。各地区に散在して採取されているが、色調が類似するものもあって実数は少ないとみられる。14世紀後半の所産とみられる。これ以外に瓷器系の産地不明品(483)が1点ある。暗灰色の比較的精良な胎土である。以上より東海産の焼締陶器類は13世紀～14世紀前半にかけて、越前は14世紀後半、信楽は14世紀代と比較的類似時期に搬入されているようだ。

参考文献

中野晴久 1994「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』

岩田 隆 1995「越前焼」『中・近世の北陸』

松沢 治 1989「信楽焼物について」『中世の信楽』滋賀県大江風土記の丘資料館

田口昭二 1983「美濃窯における白瓷と山茶碗」『美濃陶磁歴史資料館報』Ⅱ

(2) 搬入焼物の年代別出土量と組成の特長

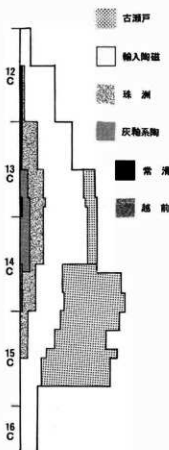
年代不明や年代比定に不安を残すものも多いが、推定した陶磁器年代から出土点数グラフを作成してみた。これは陶磁器によって編年の時期区分が異なったり、概略年代しか推定できないものも含めて、比定年代の可能性を累積的にグラフ化したものである。遺跡の実態ではなく搬入時期の多寡の「可能性」を示すものでしかないが、一定の傾向は知られよう。

まず、量的な変化を見ると、12世紀後半から徐々に増加し、13世紀代では一定の水準に達して14世紀後半でピークがあり、その後はやや量を減しながらも一定の水準を保って15世紀末には急速に落ち込む形となる。ただし、14世紀後半～15世紀代の量の多さは年代の詳細をあきらかにできなかった古瀬戸・輸入陶磁器の想定年代幅を広く取って一律的に累積した結果による。また、16世紀前半では輸入陶磁器のみがあるが、編年上の時間幅による

もので16世紀前半の所産として限定できたものではない。こうした点では遺跡の実態として提示できるものではなく、地区ごとの出土焼物の年代差も考慮されていないが、すくなくとも12世紀後半代前後から始まり、13世紀～15世紀まで一定の居住があった可能性は知られる。

次に組成を見てみる。11世紀後半から12世紀前半は輸入陶磁器の白磁のみながら、12世紀後半から輸入陶磁器の量が増加し、珠洲・常滑など複数産地のものが加わる。そして13世紀には量を増加させているが、これは輸入陶磁器と珠洲すり鉢の増加によって増幅したものであることが知られる。13世紀後半～14世紀前半にかけて古瀬戸と山茶碗、常滑などの東海産の陶器も加わるが基本構成の変化は認められない。一方、14世紀後半からは様相が変化し、総量自体は変化がないものの、珠洲製品の減少と輸入磁器の減少—古瀬戸食器類の増加の相対的な変化が認められる。特に珠洲の減少は中世を特長づける焼物の壺・甕・すり鉢の喪失につながる。

この組成変化では14世紀中葉前後での大変化が知られる。14世紀前半以前は壺・甕・すり鉢が珠洲、食器類は輸入陶磁器からなり、僅かながらの東海産の山茶碗、常滑など遠隔地のものが入る特長をもつ。つまり、珠洲・輸入陶磁器を基軸とする基本構造を維持しつつも、量的な変化と少量の遠隔地搬入品の搬入状況によって段階的にとらええる。ところが、14世紀後半以後では食器類で輸入陶磁器の減少と古瀬戸増加が相対的に進みながら、一方で遠隔地よりの焼物すり鉢・壺・甕類が認められなくなる。つまり、中世後半では遠隔地流通品はごく限られた食器類のみに残存することになる。この変化の背景はよくわからないが、在地産土器のあり方の変化＝在地生産の増加と食器類での皿の使用増加、あるいは碗類の種類の増加にみられる食器の様式変化があるのだろうか。子細は今後の検討をまちたいが、少なくともこの組成変化から特定焼物の器種のみによる遺跡存続時期の推測は難しいように思われる。



第49図 時期別焼物破片数累積グラフ

[3] 地区別・遺構別の年代

以上見てきたように尾張城跡は中世を通しての利用が想定できるが、遺跡名に「城」がつくものの、中世を通して同じ性格の遺跡であったかどうかは判断しにくい。そこで、最後に感覚的ながら焼物から見た遺跡の性格の変化と時期について触れておく。各調査地区の出土焼物量を比較するとⅢ・Ⅳ区は検出面出土のみで1～2点と極端に少なく、Ⅶ区も52点ながら検出面採取品しかない。一方、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区は比較的多くの遺物が採取され、なかでもⅡ・Ⅴ・Ⅵ区は居住遺構が周囲を含めて存在する可能性は高い。

12世紀後半～13世紀前後と判断し得る遺構はないがⅡ区のピットや土壌から比較的多くの当該期と思われる焼物が出土し、居住遺構が存在する可能性は高い。Ⅴ・Ⅵ区もかなりの中世前半の陶磁器を出土しているが、いずれも溝跡が検出面採取品で中世後半の所産と混在しているので、周辺での居住遺構の存在は想定し得るが、検出遺構で当該期の居住遺構は特定できない。

14世紀後半以後の所産は比較的大きな溝跡とみられるⅤ・Ⅵ区・Ⅰ区堀やピット、土壌のいくつかが比定で

きる。ただし、溝跡ではⅠ区堀・Ⅴ区SD1とⅥ区SD群ではその内容に差がある。Ⅰ区堀とⅤ区SD1は図示した比較的大型破を見ると、在地産土器では酸化炭焼成内耳鍋が多いが、Ⅳ区のSD2・5・6・11・12では瓦質内耳鍋の方が卓越する。もともと、Ⅴ区SD1では近世の陶磁器も採取されているので用水などに利用されて混入した可能性もあるが、瓦質内耳鍋の出土が少ない点は基本的に時期差と理解しよう。すくなくとも14世紀後半～15世紀前半頃の瓦質内耳鍋が存在する時期前後と酸化炭焼成内耳鍋を主体とする2時期前後に大きな溝跡が構築されたとみられる。溝跡と同時期の遺構を抽出することは難しいが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区いずれも内耳鍋破片あるいは15世紀後半～16世紀前半頃の陶磁器を出土したピットが認められており、少なくとも酸化炭焼成内耳鍋が認められる時期については各地区での居住があったと見なされよう。なお、その終末時期については陶磁器では大窯製品が認められないために15世紀末で終わるものと思われるが、内耳鍋や輸入陶磁器からすると16世紀の前半までは何らかの利用の可能性は残る。そして、Ⅴ区SD1などは二次的に用水や窪地として残存したと考えられる。

遺構分布ではⅠ区堀とⅤ区SD1はほぼ同方向に平行しており、現地形と合わせるるとはほぼ50m四方の区画が浮かび上がる。一方Ⅵ区SD群は上記と異なる方位であり、同様の方位は周囲に堀が認められないものの、現地形ではほぼ100m四方の区画が想定される。つまり、14世紀後半～15世紀前半では大きな堀を伴わない大きな方形区画が存在したが、15世紀後半には北西部に重複して異方位の大きな堀を伴う方形区画が出現したとみられる。14世紀後半～15世紀前半階段を居館と呼べるか問題は残るが、15世紀後半では居館的な居住遺構が存在したといえよう。ただし、両者の関係や異方位の土地区画を現出させた背景は不明である。また、Ⅵ区のみ大きな溝が集中する理由は不明である。

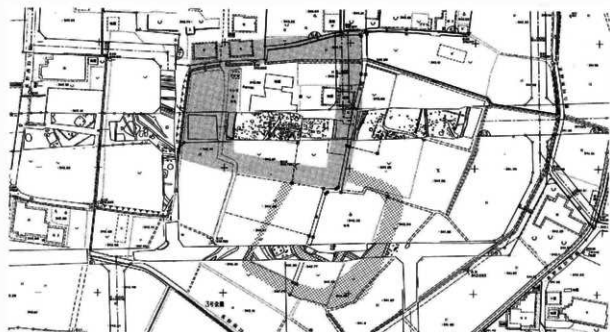


図50 想定方形区画位置図 (S₁ 1/3000)

区-遺構	カ	内	在 地 産	陶 磁 器
I-P 1	4	-		
I-P 2	-	-		古瀬戸腰折皿 1
I-P 3	4	-		
I-P 4	2	-		
I-P 6	1	-		
I-P 7	2	1		
I-P 8	4	-		
I-P10	-	1		
I-P11	1	-		
I-P13	1	-		
I-P14	1	1		
I-P15	1	-		
I-P16	1	1		
I-P17	-	-		青磁無文碗 1
I-P18	2	-		
I-P20	-	-		青磁無文碗 1
I-P22	1	-		
I-P23	-	-		白磁皿 1
I-P24	1	-		
I-P25	-	1		
I-P26	3	-		
I-P28	1	-	瓦質内耳 1	
I-P30	2	-		
I-P35	-	1		
I-P36	3	-		
I-P37	1	-		
I-P38	1	-		
I-P39	1	-		
I-P40	1	-		
I-P41	3	-		
I-P43	1	-		
I-P51	1	-		
I-P52	-	1		
I-P54	1	-		
I-P55	1	-		
I-P56	1	1	須恵質すり鉢 1	
I-P58	-	1		
I-SK 1	2	-		
I-SK 6	1	-	須恵質すり鉢 1	珠洲甕 1
I-SK 7	2	-	須恵質すり鉢 1	珠洲壺 1、越前甕 1、面花文青磁碗 1
I-SK 8	17	2		珠洲甕 2
I-SK 9	25	9	須恵質すり鉢 1、瓦質すり鉢 1	古瀬戸御皿 1、珠洲甕 2、信楽? 壺 1
I-SK10	4	-		珠洲甕 1
I-SK11	-	-	須恵質すり鉢、瓦質火鉢 1	珠洲甕 1
I-SK Z	1	-		
I-SB 1	8	-	須恵質すり鉢 2	
I-SD 1	1	4		瓦質すり鉢? 1、珠洲壺 1、伊万里碗 1、在地窯甕 1、在地窯甕植木鉢 1
I-SD 3	-	-		白磁皿 1
I-SD 4	-	-	瓦質すり鉢 1	
I-SD 5	7	-	須恵質すり鉢 2	古瀬戸瓶子 1、信楽壺? 1
I-堀上	3	1		古瀬戸鉢 1、珠洲甕 1
I-検出面	13	1		珠洲甕? 1、灰軸系陶器こね鉢 1
II南-P 2	1	-		
II南-P 3	1	-		

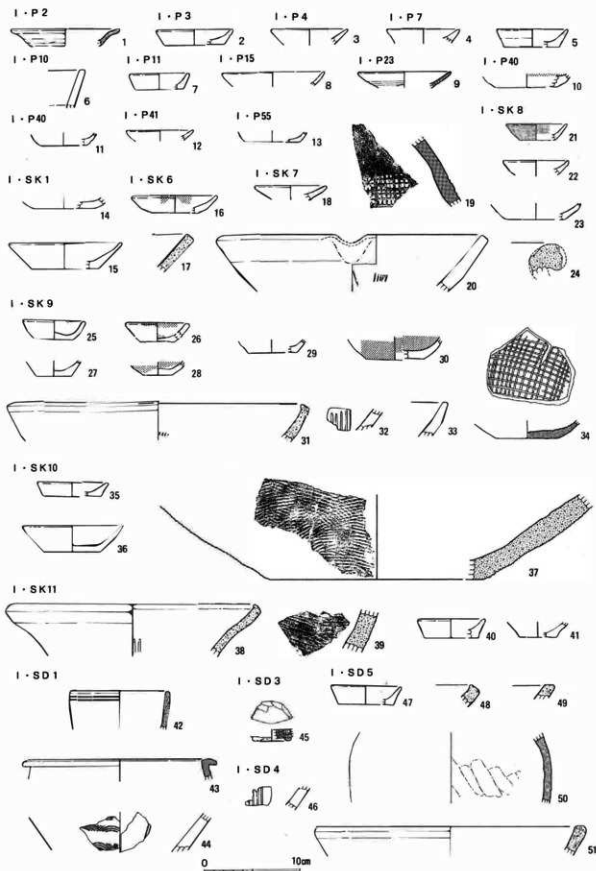
表9 遺構別中世以後の焼物出土一覧①
(内=酸化炭焼成内耳鍋 カ=カワラケ)

区-遺構	カ	内	在 地 産	陶 磁 器
Ⅱ南-P 5	1	-		信楽壺? 1
Ⅱ-P 1	1	-		
Ⅱ-P 2	1	-		
Ⅱ-P 5	1	-		古瀬戸瓶子 1
Ⅱ-P 7	1	-		
Ⅱ-P 8	-	1		
Ⅱ-P 9	1	-		
Ⅱ-P15	-	-		珠洲すり鉢 1
Ⅱ-P16	1	3		
Ⅱ-P17	1	-		
Ⅱ-P 8				
Ⅱ-SK 1	11	1		青磁画花文碗 1・蓮弁文碗 1
Ⅱ-SK 2	-	4		
Ⅱ-SK 3	7	1	須恵質すり鉢 1	古瀬戸瓶子、珠洲すり鉢 1・壺 1
Ⅱ-SK 5	-	-		珠洲壺 1
Ⅱ-SK 6	10	-		
Ⅱ-SK 8	7	-		青磁画花文碗 1、山茶碗 1
Ⅱ-SK 9	-	1		
Ⅱ-SK12	2	-		
Ⅱ-SK17	1	-		
Ⅱ-SD 1	1	5		古瀬戸瓶類 1、珠洲甕 1、瓦質香炉 1
Ⅱ-SD 3	1	-		珠洲すり鉢 1、在地窯? 土瓶 1
Ⅱ-SD 4	-	1		
Ⅱ-SD 5	3	-	須恵質すり鉢 2	古瀬戸卸皿 1、珠洲壺 1
Ⅱ-SD10	9	1	須恵質すり鉢 1	
Ⅱ-検出面	167	33	須恵質すり鉢 7、瓦質すり鉢 1・内耳 1・火鉢 2	青磁画花文碗 1・蓮弁文碗 5・玉緑青磁碗 2・無文不明碗 2・壺 1・鉢 1、白磁皿 1、青白磁梅瓶 1、古瀬戸天目茶碗 3・平碗 1・深皿 1・瓶子 2・縁輪小皿 1・仏華瓶 2・香炉 1、常滑甕 1、珠洲すり鉢 9・壺 4・壺 2、山茶碗 1、瓦質火鉢 1
Ⅲ-検出面	-	-		青磁画花文碗 1
Ⅳ-検出面	-	-		青磁香炉 1、珠洲すり鉢 1
V-P 9	1	-		
V-P10	1	-		
V-P13	3	-		
V-P14	4	-		
V-P15	2	-		
V-P16	1	-		
V-P17	1	-		
V-P19	-	-	須恵質すり鉢 1	
V-P24	1	-		
V-P25	-	-		珠洲壺 1
V-P26	2	-		
V-P27	2	-		
V-P28	2	-		
V-P29	1	-		
V-P30	1	-		
V-P34	1	-		
V-P35	1	-		
V-P40	2	-		
V-P50	1	-		
V-P51	1	-		細線蓮弁文青磁碗 1
V-P52	1	-		青磁腰張碗 1
V-P53	2	-		
V-P54	-	1		
V-P55	1	-		
V-SK 1	-	-		青磁腰張碗 1

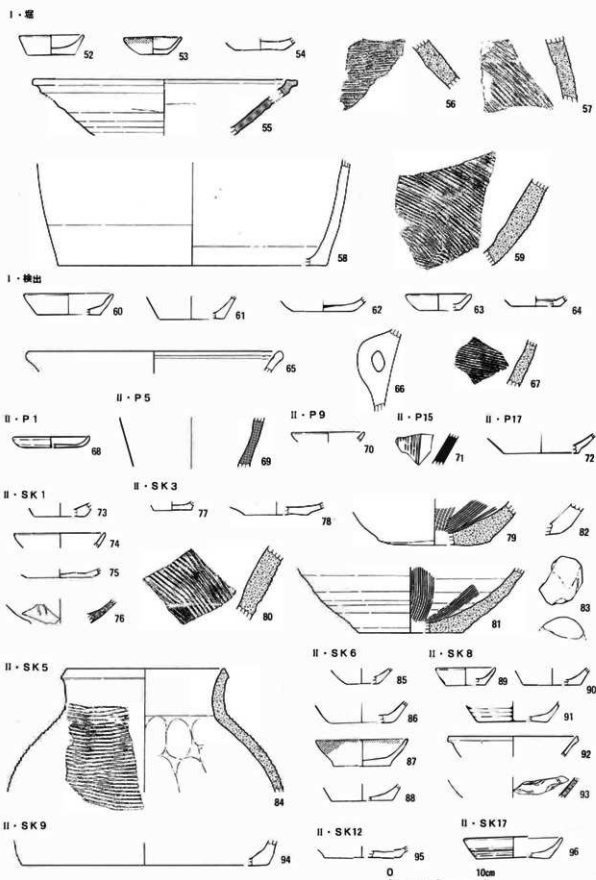
表10 遺構別中世以後の焼物出土一覧②
(内=酸化炎焼成内耳鍋 カ=カワラケ)

区-遺構	カ	内	在 地 産	陶 磁 器
V-SK2	3	3		青磁画文碗1・蓮弁文碗1、瓦質香炉1
V-SK3	4	-		古瀬戸瓶子1、近代?瓦1
V-SK5	5	1		
V-SD1	61	34	須恵質すり鉢1、瓦質すり鉢1・火鉢2	白磁IVV類碗1・皿1・不明皿?1、青磁蓮弁文碗2・雷文碗1・細線蓮弁文碗1、古瀬戸天目茶碗3・平碗3・鉢1・小皿2・茶壺1、珠洲壺1・甕3・壺5、越前壺2、信楽壺?1、瀬戸美濃本業焼一晩1・皿1、伊万里碗3・皿1・瓶1、京焼碗1
V-SD4	1	-		同安青磁碗1
V-SD6	-	-		伊万里碗1
V-検出面	71	13	瓦質内耳3	青磁画文碗1・蓮弁文碗1・玉縁碗2・無文碗3・不明碗1、青白磁梅瓶1、青花皿2、古瀬戸天目茶碗1・平碗1・小皿1、信楽壺1、常滑壺1、珠洲すり鉢2・壺5・壺5、山茶碗1、瓦質火鉢2、瀬戸美濃本業焼碗1・鉢1、伊万里碗2、越中瀬戸向付1、在地窯土瓶1・急須1
VI-P3	-	-		珠洲すり鉢1
VI-P7	-	1		
VI-P9	1	-		
VI-P14	1	-		
VI-P16	1	-		
VI-P20	-	1		
VI-P21	-	-		
VI-P28	1	-		
VI-P35	-	-		古瀬戸卍皿1
VI-P36	1	-		
VI-P37	1	-		
VI-P38	1	-		
VI-P43	3	-		
VI-P44	1	1		
VI-P45	1	-		
VI-P48	1	-		青花皿1
VI-P52	-	1		
VI-P53	-	1		
VI-P73	1	-		
VI-SK2	3	-		珠洲壺52
VI-SD1	39	12	瓦質内耳2	白磁IVV類碗1、青磁蓮弁文碗1、青白磁合子1、古瀬戸茶壺1、越前壺1、珠洲壺1
VI-SD2	7	1		青白磁合子1、青磁玉縁碗1、瀬戸美濃新業焼碗?1、瓦質火鉢1
VI-SD5	89	9	須恵質すり鉢1、瓦質内耳5、土器香炉1	白磁IVV類碗1・V類碗1・皿1・多角杯1、青磁画文碗1・蓮弁文碗2・玉縁2・無文不明碗2・不明碗1・鉢1、古瀬戸天目茶碗4・花瓶1・卍皿1・燗台1、珠洲すり鉢4・壺51
VI-SD6	35	4	須恵質すり鉢1、瓦質内耳4、土器香炉1	青磁画文碗1・蓮弁文碗2、古瀬戸小皿2・縁軸小皿・底卍目皿1・花瓶1、山茶碗1、常滑三筋壺1、越前壺1、珠洲すり鉢4・壺2・壺51
VI-SD10	-	-		珠洲壺1
VI-SD11	14	-	須恵質すり鉢2、瓦質内耳1	白磁IVV類碗1・皿1、青磁画文碗1・蓮弁文碗1・無文碗1、古瀬戸平碗1、珠洲すり鉢3・壺4・壺53
VI-SD12	-	-	瓦質内耳1	越前壺2、珠洲すり鉢1・壺2
VI-検出面	56	21	須恵質すり鉢2、瓦質すり鉢1・内耳2・火鉢1、内耳質すり鉢1	青磁画文碗2・不明碗1、青花皿1、古瀬戸小皿1・縁軸小皿2・瓶類1・茶壺1・鉢1、珠洲すり鉢5・壺4・壺4、越前壺2、産地不明器系壺1
VII-検出面	22	21	須恵質すり鉢1	青磁画文碗1・不明碗1、古瀬戸香炉1、珠洲すり鉢1・壺4、瀬戸美濃新業焼碗1

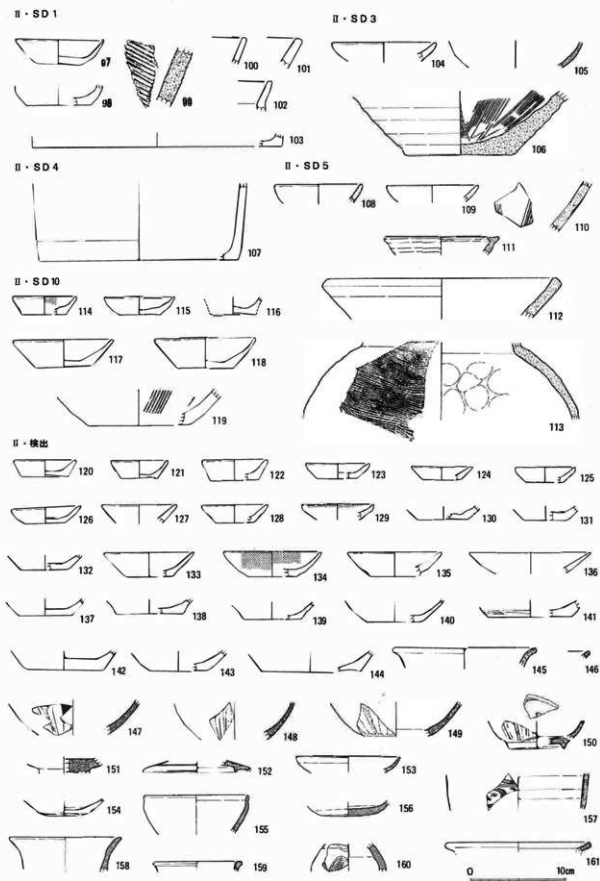
表11 遺構別中世後の焼物出土一覧③
(内=酸化炎焼成内耳鍋 カ=カワラケ)



第51图 出土中世烧物实测图①(1:4)

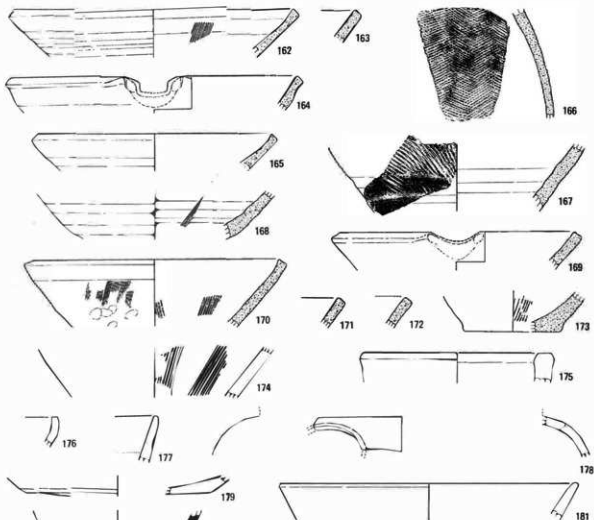


第52图 出土中世烧物实测图②(1:4)

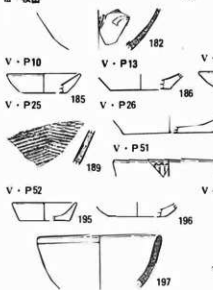


第53图 出土中世埴物实测图③(1:4)

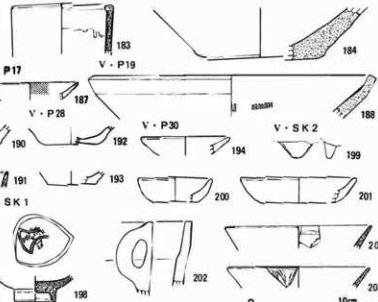
II・検出



III・検出



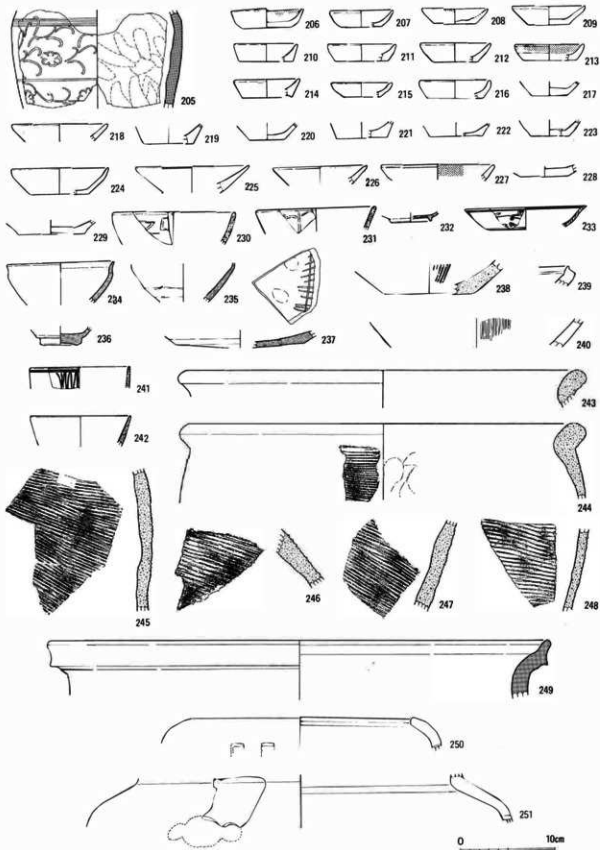
IV・検出



第54図 出土中世焼物実測図④(1:4)

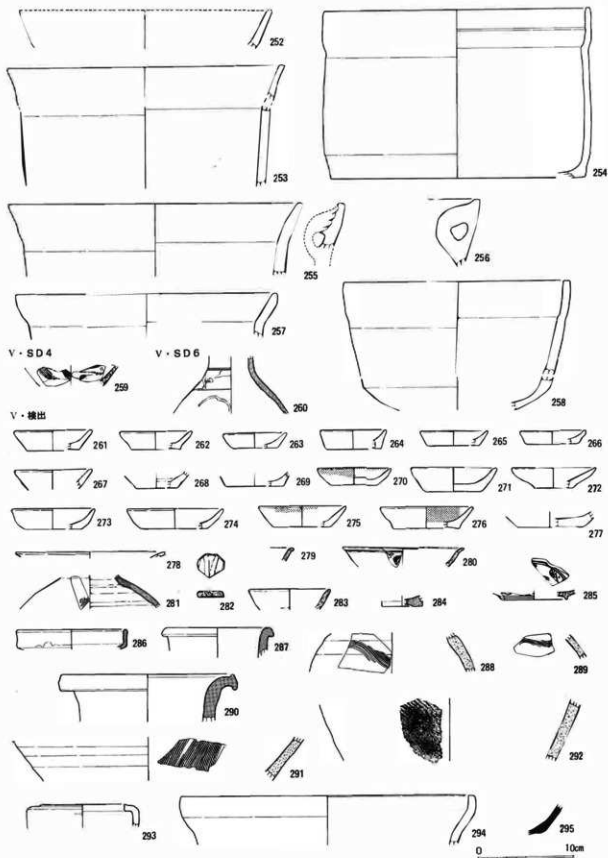
V · SK 3.

V · SD 1



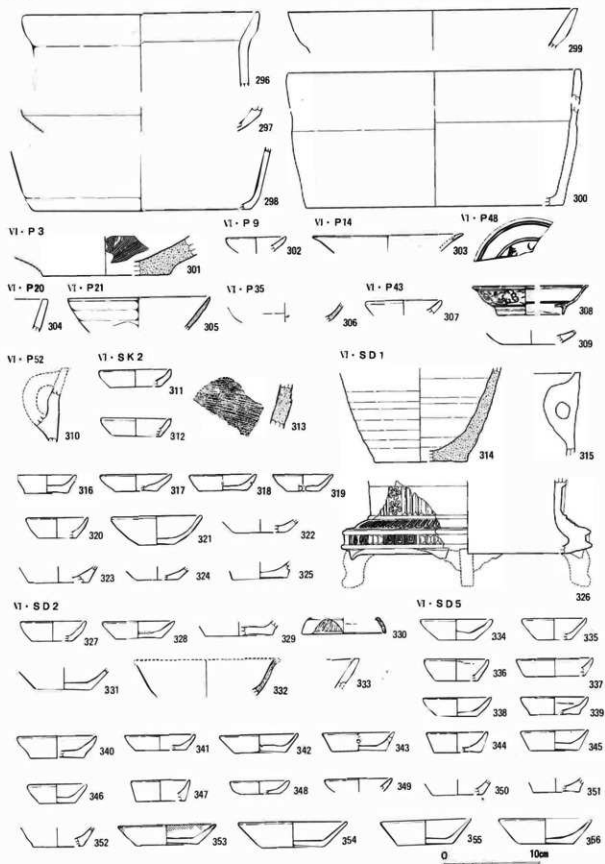
第55图 出土中世烧物实测图⑤ (1 : 4)

V・SD1



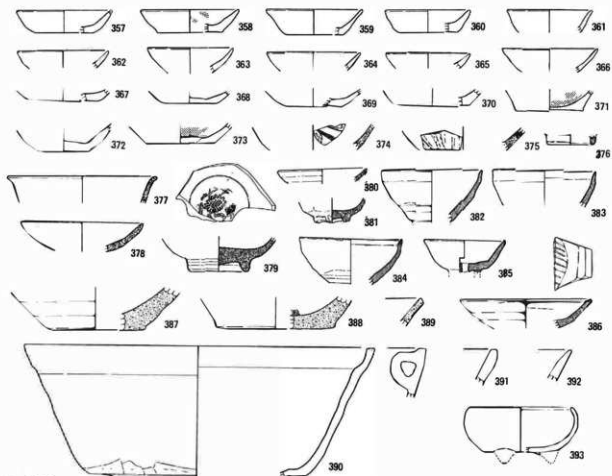
第56図 出土中世焼物実測図⑥(1:4)

V · 横

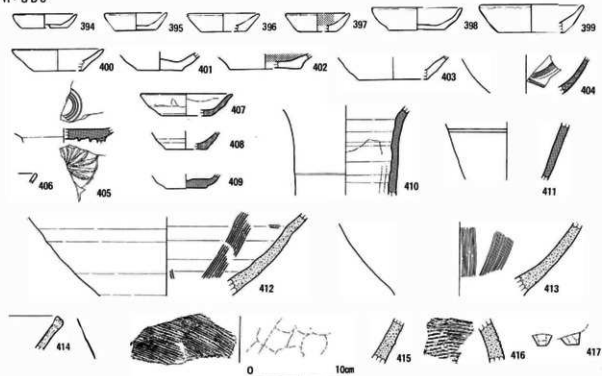


第57图 出土中世烧物实测图⑦(1:4)

VI · SD 5

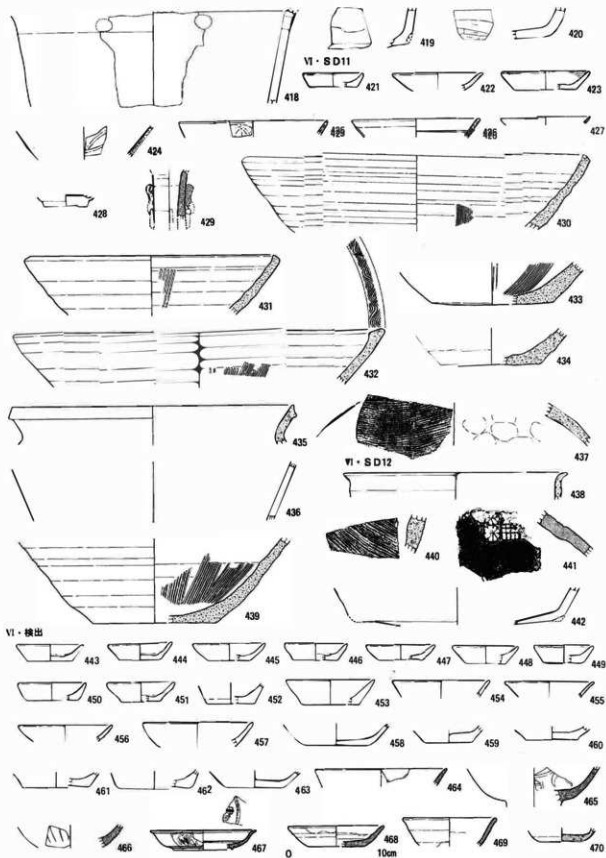


VI · SD 6



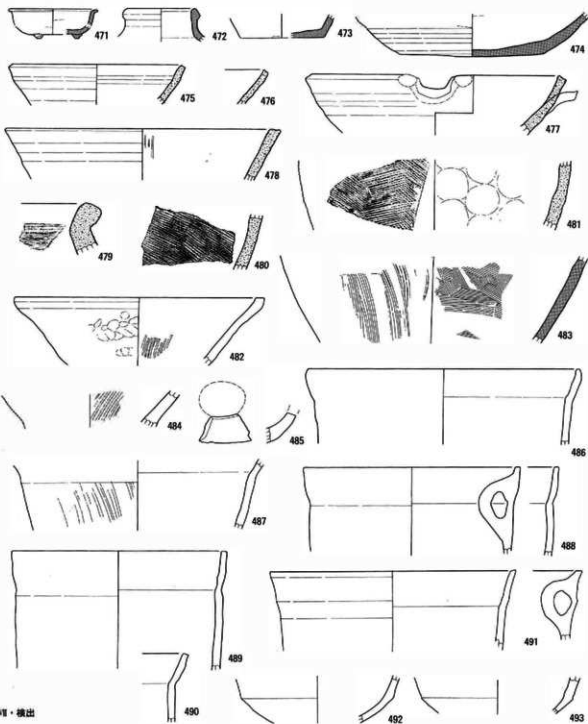
第58图 出土中世烧物实测图⑧(1:4)

VI · SD 6

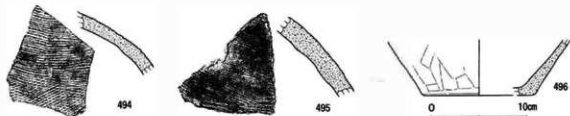


第59图 出土中世烧物实测图⑨(1:4)

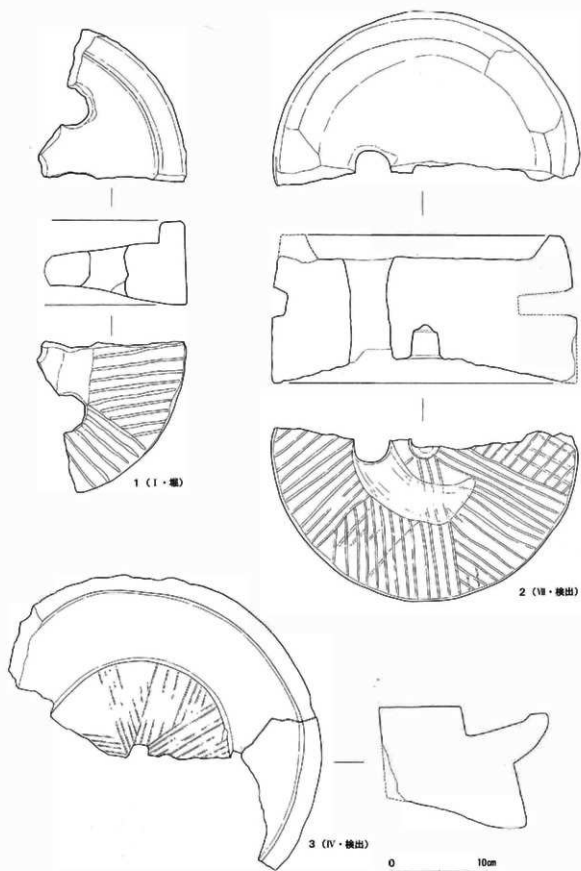
VI・出土



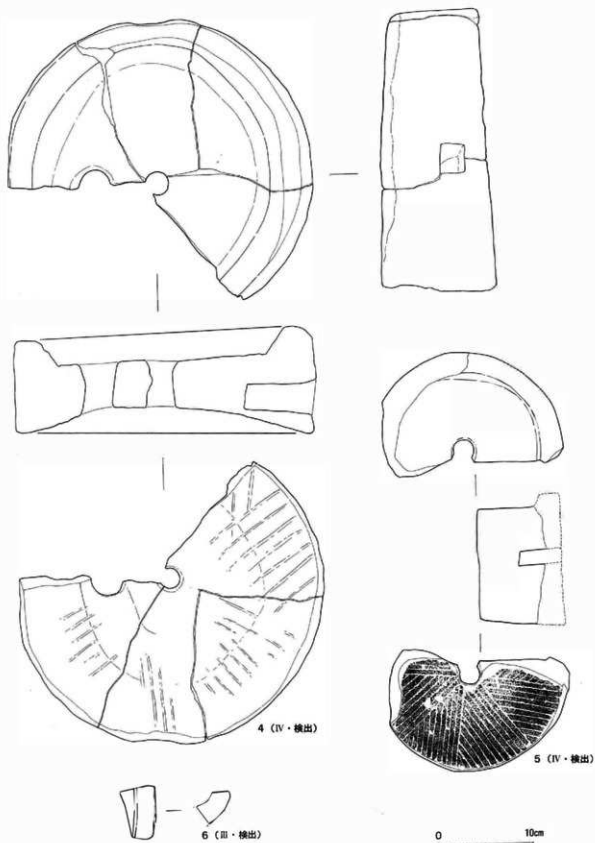
VII・出土



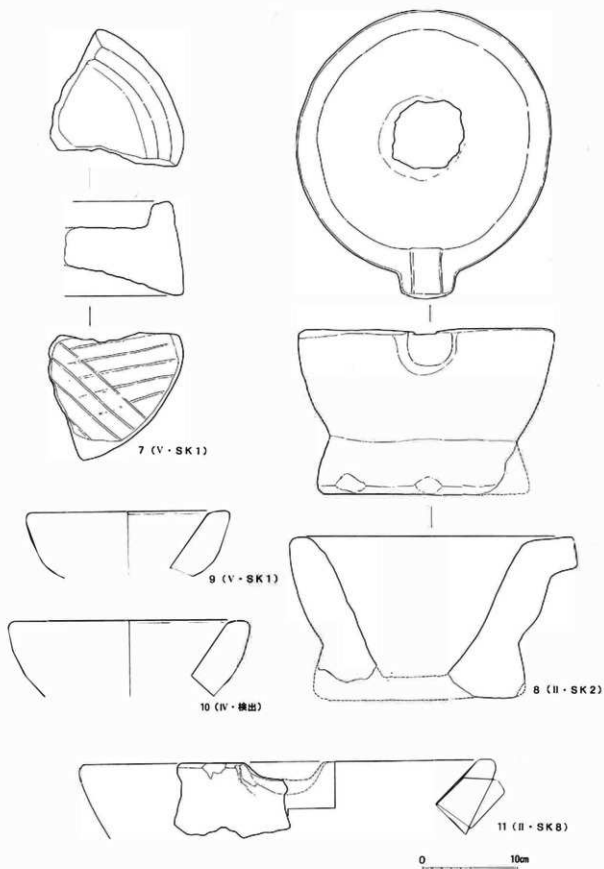
第60图 出土中世烧物实测图⑩(1:4)



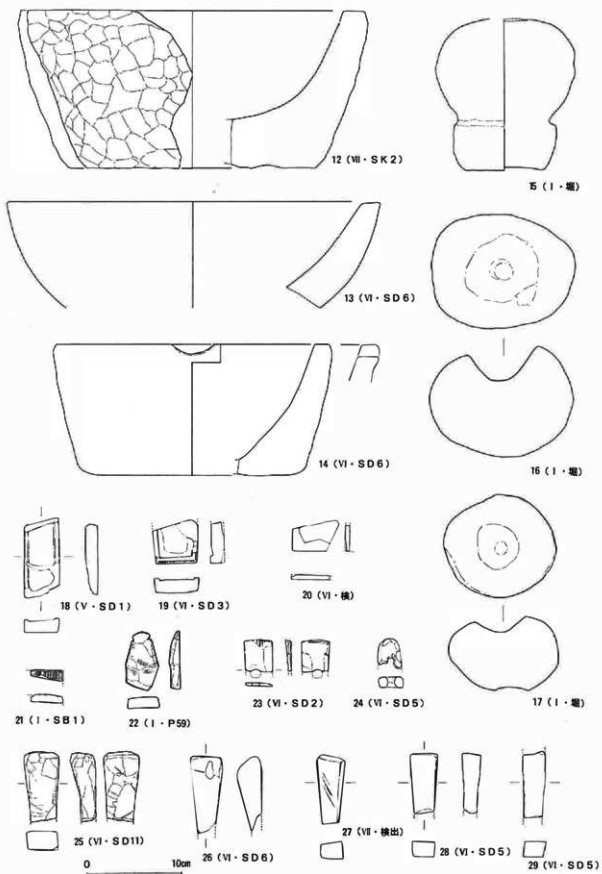
第61図 出土石製品類実測図① (1 : 4)



第62図 出土石製品類実測図② (1:4)



第63図 出土石製品類実測図③ (1:4)



第64図 出土石製品類実測図④ (1:4)

II · SK 3



1

II · SK 4



2

熙寧元寶



3

治平元寶



4

天聖元寶



5

治平通寶



6

至道元寶?



7

皇宋通寶



8

聖宋元寶



9

永樂通寶



10

II · 橫出



11

景德元寶



12

皇宋通寶



13

皇宋通寶



14

元祐通寶



15

洪武通寶

V · SD 1



16

天禧通寶



17

天聖元寶?



18

政和通寶



19

開元通寶?



20

天禧通寶



21

天聖元寶



22

政和通寶



23

天聖元寶



24

天聖元寶



25

VI · SD 5



26

天聖元寶



27

天聖元寶



28

天聖元寶



29

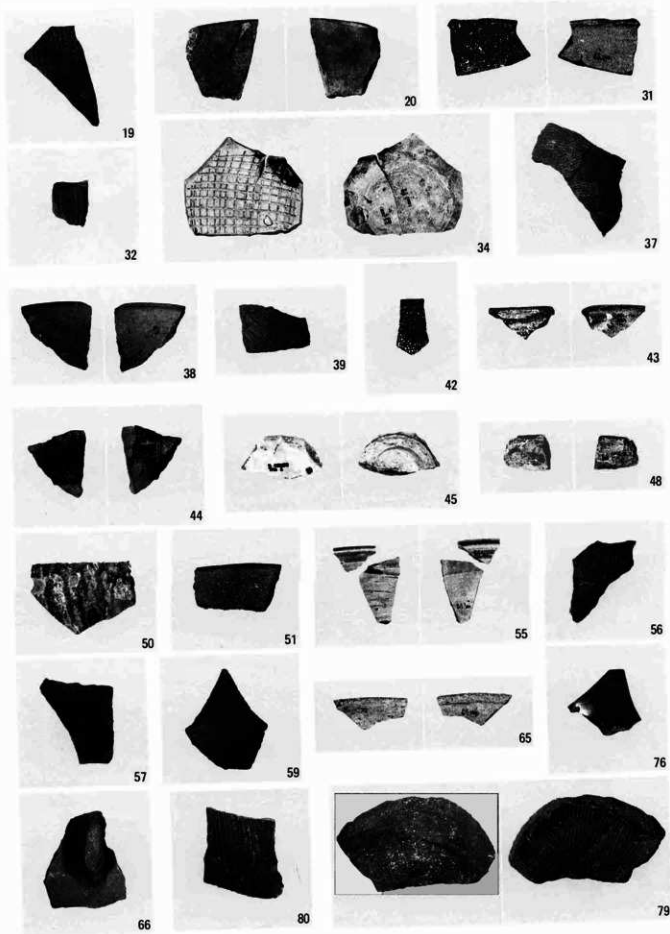
天聖元寶

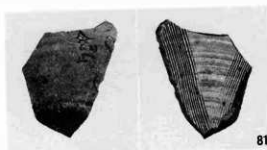


30

VI · SD 6

第65圖 出土古錢拓影

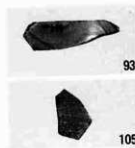




81



84



93



105



106



110



111



112



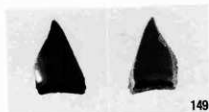
147



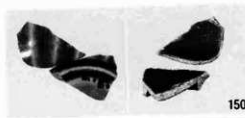
148



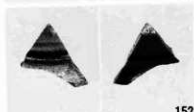
113



149



150



152



154



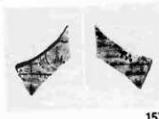
151



155



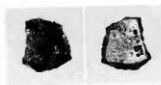
156



157



158



160



162



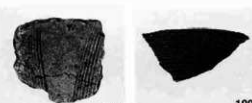
164



169



173



174

189



166



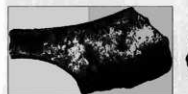
167



168



170



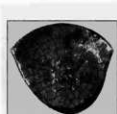
178



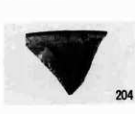
188



197



198



204



203



230

231



205



232



233



234



235



236



237



238



240



241



242



243



244



245



246



247



249



248



251



256



259



260



281



280



282



283



285



288



290



289



291



292



301



301



308



313



314



326



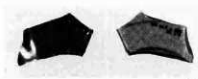
330



332



374



375



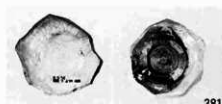
377



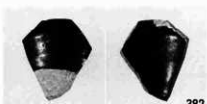
378



378



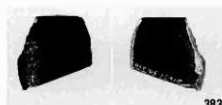
381



382



379



383



384



386



404



385



388



405



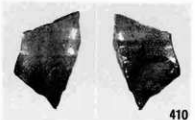
407



409



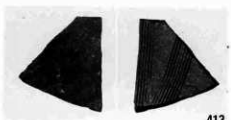
411



410



412



413



415



424



425



426



427



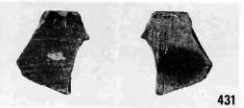
428



429



430



431



432



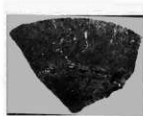
435



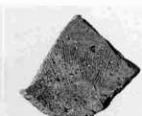
437



438



433



439



440



441



465



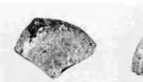
467



468



469



470



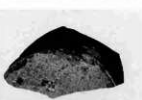
472



477



479



473



478



480



481



482



494



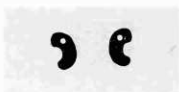
495



VI区



II区



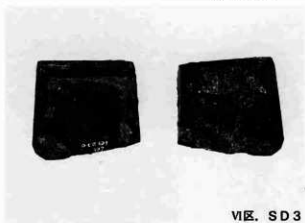
II区



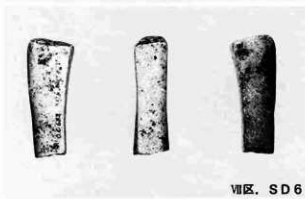
VI区. SD 2



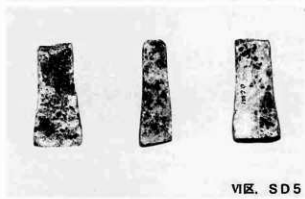
VI区. SD 1



VI区. SD 3



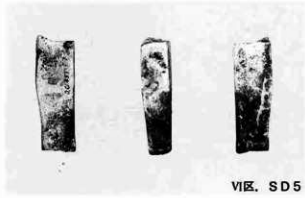
VI区. SD 6



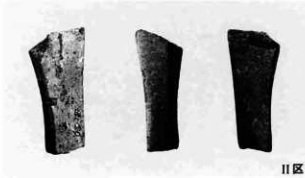
VI区. SD 5



VI区



VI区. SD 5



II区



II区

報告書抄録

ふりがな	おわりじょうせき							
書名	尾張城跡							
副書名	市道古牧朝陽線道路改良事業・長野市西尾張部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第89集							
編著者名	千野 浩 市川隆之							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地長野市立博物館内 ☎026-284-0004							
発行年月日	平成10年3月25日							
印刷製本	奥山印刷工業株式会社 長野市大字大豆島字本郷前5959番地1 ☎026-221-3243							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おわりじょうせき 尾張城跡	長野県長野市大字 西尾張部596-1	20201		36° 38' 40"	138° 13' 58"	平成5年7月26日 ～12月20日 平成7年5月10日 ～8月21日	約4,700㎡	道路改良 土地区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
尾張城跡	集落址 中世居館	弥生 古墳 平安 中世	堅穴住居址 溝跡 土壇 堅穴住居址 土壇 堀(溝) 土壇 柱穴		土器・扁平片刃石斧・管玉・勾玉 土師器 土師器 在地系土器 須恵質土器 瓦質土器 酸化炎焼成土器 輸入陶磁器 古瀬 戸 珠洲 瓷器系陶器 石臼 茶臼 硯			

長野市の埋蔵文化財第89集

尾張城跡

平成10年3月20日印刷

平成10年3月25日発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 奥山印刷工業株式会社